

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

宮 越 勉

— Abstract —

ARISHIMA Ikuma and SATOMI Ton in the beginning of “SHIRAKABA”

MIYAKOSHI Tsutomu

It can be said that in the beginning of “SHIRAKABA” (1910–1914) Arishima Ikuma (real-name: Mibuma) greatly contributed to introduce the work of major Western artists such as Cezanne into Japan. Shiga Naoya, however, who was one of his classmates and also one of his bosom friends, looking back on his youth and told later in life (1947): “Ikuma had already preceded rather than I in literature as well as in painting by the same token in those days.” Then, I criticize several pieces of his writings, e.g. ‘*Bi-shounen*’ (A Handsome Boy), focusing on the novel ‘*Koumori no Gotoku*’ (Like A Bat, 1911–1912). Most of the novels were created as a result of Ikuma’s experiences studying in Europe (1905–1910). When we look them up in detail from the point of view of modern literature, we can appreciate his literature by focusing on the novelty of the subject matters and the development of the plots, etc. And I want to add analyzing the following; the fact that Ikuma were quickly getting on bad terms with Shiga just after Ikuma came back to Japan, the fact that Ikuma got married to a well-born woman instead of a girlfriend of lower birth who Ikuma had been engaged to, and the matter of whether he should look after Ton, his younger brother.

Satomi Ton (Arishima Takeo, his eldest brother, senior to him by 10 years, Mibuma, his second eldest brother, senior to him by 6 years) started his literature strongly influenced by Shiga. When we examine some ten pieces of his short novels which he wrote in the beginning of “SHIRAKABA” (e.g. ‘*Otamisan*’ Ms. Tami, ‘*Tomodachi no Mimai*’ Visit My Friend, ‘*Iruma-gawa*’ The River Iruma. ‘*Tegami*’ Letter, ‘*Shounen no Uso*’ A Boy’s Lie,), we can appreciate those pieces by focusing on the diversity of the subject matters and the skillfulness of depicting detail, etc. Here I add the following; Shiga made good friends with Mushanokouji Saneatsu after Ikuma came back from Europe, and Shiga was particularly kind to Ton who had had similar literary disposition to Shiga’s, while Ton had been annoyed about the blind relationship between his older maid and himself, and had lost the chance to have a talk about it with Shiga. That’s why Ton had told a lie to Shiga. So, in this issue, I want to criticize his pieces with an emphasis on his unfinished autobiographical novel, “*Kimi to Watashi to*” (You and I, 1912), which was a work of honest confession. On close reading, I can appreciate the distorted relationship between Shiga (YOU) and Ton (I), and their passion for literature and agonies, etc.

《個人研究第1種》

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

宮 越 勉

有島生馬（本名壬生馬）は、今日では画家としてその名を多くの人々に知られているが、「白樺」出発期の有力なメンバーの一人で、幾つかの優れた文学作品（小説）も発表してきたのである。本稿は、その小説作品の一つ一つを論評することに主眼を置くが、その前にその生い立ちから「白樺」創刊（明43・4）前後までに至る足跡を辿ることから始めたい。

生馬は、明治15年11月26日、父有島武（42歳）、母幸（30歳）の次男として、横浜市月岡町の横浜税関長官舎で生まれた。兄武郎の四歳下、姉愛は二歳年長で、彼に二年遅れて妹シマ、三年遅れて弟隆三、六年遅れて英夫（里見弴）、十一年遅れて行郎が生まれている。明治24年7月に父武は国債局長となり東京麹町永田町の官舎に移り、生馬も麹町小学校に転校していたが、明治28年1月に学習院初等科6年に転入、9月には中等科に進学した。この頃より志賀直哉（明16・2生）と親しくなり、やがて志賀と同じ学習院の仲間、田村寛貞、森田明次、黒木三次、松平春光、徳田速雄、川村弘、柳谷午郎、米津政賢、三条公輝、佐久間忠雄、杉山得一らと儉遊会（のち睦友会）を結成（志賀直哉の「蝕まれた友情」（「世界」，昭22・1～4）によれば睦友会の会員は13人だったという）し、回覧雑誌「儉遊会雑誌」（のち「睦友会雑誌」）を出したのであった。志賀の言によれば、生馬は「詩人」で雑誌にはいつも新体詩を出していたという（「有島壬生馬兄足下」，明43・7）。また、同じ志賀の後年の回想（「蝕まれた友情」）によれば、生馬は直哉にとって「兄事する唯一の親友」で「兄貴分」であり、「文学に関しても、美術に関しても」生馬が直哉より「一步も二歩も先きを歩いてゐた。」とされているのである。

が、明治33年、生馬は肋膜炎を患い、翌34年には父の故郷鹿児島県川内平佐村で静養することとなった。ここで日本人のカトリック僧に会い、イタリアの芸術やイタリア語の魅力などを聞き、心をひかれる。こうして、この年の9月、東京外国語学校伊太利語学科に入学した。当時の伊太利語専攻は隔年募集で生馬は第二期生に当たるといふ。明治36年には、小山内薫の紹介を得て、私淑していた島崎藤村を小諸に訪ねたのだった。翌37年7月、東京外国語学校を卒業、藤島武二の門に入り洋画の勉強に打ち込む。小山内薫らの同人誌「七人」の表紙画その他に関係したのもこの頃であろう。また、この前後、直哉らとともに、歌舞伎や寄席、とりわけ娘義太夫に熱を上げたのだった。こうし

て、明治38年5月、生馬はイタリア留学の途につくことになる。出発に際し、恋人で婚約者になっていた関安子（生馬の駒込円通寺下宿時代（明37）に知り合ったものと思われる。安子は母と弟と暮らし電話交換手をしていた。生馬と知り合っのち有島家の女中となった。）の後事は、親友の直哉と黒木三次に託したのであった。

生馬を乗せたドイツ船ゲネラル・ローラン号は、横浜港を出航し、約一ヵ月の航海ののち、ナポリ港に着いたが、東京外国語学校の教授伊東平蔵から事前に連絡を受けていたナポリ東洋語学校の日本語教授ジュリオ・ガッティノーニとその息子が出迎えたという。ナポリからローマへ、こうして約一年半のローマ生活が始まる。生馬から直哉に宛てた書簡（明38・7・7）では、「Yの事については増田君を訪問してくれたり姉の処へも行つてやろうと云ふが始めからの行きがゝりとあきらめて出来る丈けの事を頼む」とか、「今夏はローマが七十五年日の暑さで中々苦しい 日中は石道がやけてトテモ外出は出来ない 朝夕足のいたくならない程に散歩などして居る 近日近郊の山へ避暑へ行く積りだ」などと当地ローマの様子などを伝えている。実際、生馬はローマ郊外のモンテ・カーヴォ山の中腹にあるロッカ・デ・パーパーでこの夏を過ごしたのであった。また生馬は、同じく画家を志していた増井清次郎と知り合っていたが、清次郎の庇護者である侯爵夫人の紹介でヴィッラ・メーディチのフランス・アカデミーに通っていた。が、11月には国立美術学校の自由教室に入学し、ここに集まって来ていた様々な国の画学生たちと交流したのである。翌明治39年9月には、アメリカ留学を終えてヨーロッパにまわってきた兄武郎とナポリで落ち合い、二人でヨーロッパ各地を旅行し、翌40年2月、帰国する武郎をロンドンに見送り、パリに留学することにした。翌41年の夏、スイスに旅行し、秋パリに帰ってくるとセザンヌ回顧展が開かれていて、セザンヌに圧倒されたのだった。その後パリ滞在がしばらく続くが、パリでは萩原守衛、高村光太郎、南薫造、梅原良三郎（のち龍三郎）などと交わり、その間に南フランスやイタリア各地への旅行もしたのであった。これら滞欧時代の体験をもとにして、生馬の大きな功績となる評論「画家ポール・セザンヌ」（「白樺」，明43・5，6）や幾つかの小説作品などが産み出されたのである。

こうして生馬は、明治43年1月、日本郵船の宮崎丸に乗りマルセイユを出発、コロンボ、シンガポールなどを経て、一ヵ月余りの航海を終え、2月下旬に神戸に着いたのであった（「モンマルトルの友に」（「白樺」，明43・7）にこの帰国途上の所感や見聞が詳しく綴られていて、マルセイユで初めてオペラを観たものの終わりの一幕を見ずに飛び出したこと、日本人と西洋人の外観の相違に関する所感、コロンボに日本の勢力が大きく及んでいる様を見たことなどを知ることができる。）。一方、直哉と惇は国府津まで行き、生馬を出迎えたのであった（志賀日記，明43・2・25）。この時の印象を志賀はその日記に、「有島は一層落着きが出来て来た、然し中々鋭さうにもある。先より強くなつたやうに思ふ。……（略）……自分は又少時すると此男にイクラカ、かぶれないわけに行きさうもない。」と記している。が、これが後年の回顧（「蝕まれた友情」）になると、「君」（生馬）は汽車の一等車から「樺山海軍大将」のあとから降りて来て、「樺山さん」に挨拶をし、「悠然とした態度」で「僕」（直哉）たちの所に引き返して来、乗り換えの客車に乗り込むと、腕組みをし、一方の足を膝に重ね、ゆっくりした調子で「僕」を顧み、「どうだい」と言ったというのである。その再会の印象は

初期「白樺」の有馬生馬と里見淳

甚だしく悪いものだったということにされている。明治43年の直哉の日記記事に洋行帰りの生馬に対するひるみがあったのか、それともその後年の回顧に誇張があったのか、その両者の懸隔に戸惑ってしまう。が、これ以降、直哉にとって生馬の存在が次第に小さくなっていったことは確かである。一方、生馬側の内面を窺う資料に乏しいので、若き洋行帰りの生馬の人生観の変化や対友人（直哉）観などは掴みにくいのだが、絵画方面でも文学方面でもその生活のあり方全般にわたり、西欧体験を経てのそれ相応の自信を得ていたことは想像に難くない。

とはいえ直哉は、「蝕まれた友情」で、帰国後の生馬とは頻繁に往来し、「旧い感情が甦り、段々溶け合ふ」ようになったといい、また「実際、あの頃の君の絵はよかつた。」（傍点は引用者）として、「曇日の海」という絵を大変褒めている。その一方で、明治43年4月22日の生馬の志賀宛書簡は、「今ゆつくり君の原稿を読んで居るが速夫の妹まで読んだ 而して君の小説をかく力の余りあるのを至る処で発見した 殊に多くのオリヂナリチーを認める事が出来た ダイナマイトではある人が話をする体にしたのは蛇足だと思ふが何んの必要があるのだろう 第一回の如きは不用にはあらざるか」というもので、直哉の習作の草稿類を読みその文学的才能を見抜いたばかりではなく、未定稿「ダイナマイト」の構成上の欠陥も指摘するなど、生馬の小説批評眼は今日からみても優れたものだったと感じさせるのである。生馬帰国後の直哉との関係は、その実情として表面上穏やかに推移していったとみるのが妥当だろう。

ところで生馬は、帰国後間もなく関安子との婚約を解消し、明治43年11月には男爵令嬢の原田信子と結婚したのであった。この生馬の翻意、素早い転身ぶりに直哉は多少の不快を感じたが、直哉自身にも自家の女中Cとの結婚問題の挫折体験（明40）があり（キリスト教徒だった直哉はしばらく姦淫戒の問題で真剣に悩んだが放蕩生活に入っていた）、強くは非難できなかったのである（「蝕まれた友情」）。が、直哉はのちに、生馬のいわゆる「スイート・ホーム」に浸り切ったその生活ぶり（明治44年6月25日）を「或る一夜」（「新小説」大9・1）で小説化し、批判したのであった。直哉の生馬に対するその友情の亀裂感から生じる悪感情は、長い期間に渡り燐ぶりつづけ、「或る一夜」の発表時点でいわば小規模の噴火をみせ、そして戦後の「蝕まれた友情」の発表時点で大爆発をみせたともみるべきだろう。

以上のことはともあれ、生馬は、明治43年4月スタートの「白樺」の同人として加わり、新体詩、美術評論、小説などを以後発表していく。本稿では、その功績の大きいとされるセザンヌ紹介の仕事などの検討は別の機会に譲り、もっぱらその小説作品の論評を試みていきたいと思う。ただし、生馬の小説に対する先行研究はわずかな数の短評を有するのみなので、私流の紹介と論評が中心となる。

二

「ボーヂュの森」（「白樺」明44・1, 2）については、まずこれが小説かどうかという問題がある。一月号の目次では「ボーヂュの森林」とあるのみで、題名の下に（小説）と付されていない。しかるに、二月号の目次では「ボーヂュの森」（小説）とされているのである。同時代先行の「スバル」（明

42・1)の目次を見ても小説の場合、題名の下にはっきりと(小説)と付されている。だから、作者の意向が編集の際にも反映されたものと考えたい。「ボーチュの森」の場合、一月号ではわずか五ページ分しかなかったものが、二月号では二十一ページ分となって完結していて、二月号の方に力点がある。私は、そのサブタイトルとして(滞欧日記より――其の一)とあるにも関わらず、「ボーチュの森」を単なる日記や紀行文の類とせず、何らかの潤色や虚構が加えられたもの、もしくは小説的な意匠が施されていると見、小説として扱うべきだと考える。では、この作品の美点、優れた所はいかなるものかを中心に、しばしその梗概を綴りながら考察していきたい。

一九〇九年冬、フランスの地中海の海岸からナポリまで下って、春には再びフランスの東北地方に旅をつづけて来、ボーチュ県に入った、と書き起こされる。「自分」(作者壬生馬としていい)は、今エピナールの町に到着したのだが、「宮内省の森林官の一人」とともに「此旅」を続けて来たというのである。この「宮内省の森林官の一人」はその名前(頭文字さえ)も示されることなく、以後影のような存在として「自分」に同行していることに留意したい。この二人に、大林区署長のドゲイという七十近い老人、小林区署長のスタイネルという四十格好(のち三十格好と訂正)の人が加わり、パン、ル、パンという温泉場方面に行った折の或るエピソードが展開される。それを簡単に纏めて言えば、そこの山林事務官L氏(二十六七の美しい青年で女性に大変もてる)と彼に片思いの女工ガブリエット、それにガブの婚約者で猛烈な嫉妬家のルイ(のちヂヤンと訂正)がからむ、いわば若い男女の三角関係である。とりわけ「余程感情の強い女」あるいは「傲慢な女」とされたガブリエットの存在(実際に「自分」はこの十八九とみられる女工を見かけ観察した)が強調されている。だが「自分」は、青々とした森に接すると、「あの村の人間の悲み喜びも此処から見る時は森の中の狐や狸のする仕草と同じ小さな碎かれた拾ふ事さへ出来ない憐れなものゝ様に思はれた。」とするのであった。大自然の壮大さに比べての人間の営みの卑小さをいってしよう。次に、この四人がBrayeresという停車場方面まで遠足を試みた折のことが展開される。この地方の小林区署長のH氏、山林事務官のM氏、山林事務官補のS氏が出迎えた。一行(都合七人となる)は、停車場の傍にある二つの工場を見学する。職人たちが小鳥を飼って親しんでいる様を目にしたりしながら、さらに一行は監守人の番小屋までおよそ二里の道を進む。道々、「僕」(これ以降「自分」という呼称に「僕」が混在することになる)はS氏と話をし、彼が大変な憂国家であることに驚くのだった。番小屋に到着してのち、猪に荒らされた畑を見たりした。道は林の間に入っていく。鱒の養魚場を見たり、M氏の苔菌についての話を聞いたりする。そして「僕」は或る泉のほとりで昼食の弁を食べながら、ドゲイ氏からアルゼリーでの仕事の話やその気候および風俗などの話を聞いた。一行(先の七人から番小屋の手前でS氏が帰り番小屋にいた監守人が何人か加わっている)の森林横断はさらに続く。夕刻、灯火が一つ見えた。一人の老いた監守の家ということである。老婆が一行を出迎えた。そこにマリーという一人娘がいた。明後日に嫁入りを控えていたが、彼女は美しく、「森の黒い淋しい中に咲いた、唯つた一輪の花」とされる。このマリーなる娘は、先のガブリエットと明らかに対照をなしている。こうして、「僕は初めて人間の自然に於ける、正当な、貴い位置を見出した様に思つた、都会では人は塵や芥の様に取りあつかはれて居る、今は前日パン、ル、パンで考へたとまるで反対に人間が貴く考

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

へられた。」とするのであった。さらにこの家を去る時、「僕はボーヂュの広い森の中にも此花以上巧妙な花をもつ草も木も決してないと考へた」としてマリーの美しさを強調する。そして四人は、三十分後には La Houssiere の停車場に着いたのであった。後日談としては、その後スタイネル氏と書信を交わす友人となり、最近の手紙から L 氏がアルゼンチンに去ったことを知るのであった。

以上のような「ボーヂュの森」は、生馬の第一創作集『蝙蝠の如く』（大2・2、洛陽堂、島崎藤村の「序」がある）に収録され、さらに第二創作集『獣人』（大4・6、鈴木三重吉方を発行所とする）にも収録された。そこで鈴木三重吉はこの作について、「アルサスに接した大森林に於ける、フランスの地方的生活を通して『自然』と『人間』との対比を描き出した、浄純なる黙想の記録である。同時にその中のいろいろの小話に於て人間の『性』の交渉についての、繊麗な詩と温純な批判とに接することが出来る」と高く評価している。また、本多秋五は、「ごく地味な作品である」としながら、「私は前にこれを読んで感心したが、こんど読み直して改めて感心した。これは繰り返して読むにたえる傑作である。少し誇張していえば、鷗外の「舞姫」に比肩すべきヨーロッパ滞在記念作品といえる。」とし、その「平静な第三者の視察報告の体をとっている」描写のあり方をとりわけ称揚したのであった（『明治文学全集76初期白樺派文学集』（昭48・12、筑摩書房）の「解題」より）。だが、先にも触れた「自分」（あるいは「僕」）に同行した「宮内省の森林官の一人」（日本人）の存在が全く目立つことがなかったことに改めて注意したい。事実としてこの人物が何らの言動をしなかったとは考えられない。が、それはボーヂュの自然と人々を描く際に不必要なものとして消去されたのだ。その一方で「自分」（あるいは「僕」）に焦点化され、その平静な観察眼によって、ボーヂュ地方の人々の生活の種々相があたかも連続する絵画の一枚一枚のように展開されていったのである。さらにこの作品の最も優れている点を言えば、作中のガブリエットとマリーの対照、前日に大自然の中で人間の営みを卑小なものと感じたものが、次の日には大自然の中に生きる人々に尊厳さを見出したその転回の妙味にあるのではなからうか。L 氏とガブリエットのエピソードは余りにも人間くさいドラマを垣間見せていた。しかるにボーヂュの森林通過という遠足の最終部に置かれたマリーの清楚な美しさは人間存在の貴さを感じさせるに余りあるものだったのである。が、後日談として L 氏のその後のことを書き添えているのは、語り手の前者の感懐が否定できないものとしてある現実を語ったものでなおさらには出来ないのだ。この作は、「繰り返して読むにたえる傑作」（本多秋五）であるには違いないが、生馬の単なるヨーロッパ滞在の一見聞録の類としてではなく、小説としてのいわば実体験の濾過作用や意匠も十分に施されたものとみるべきだと思うのである。

「独逸の古羅馬人」（「白樺」、明44・4、のち「新しき古羅馬人」と改題、改稿されて『蝙蝠の如く』に収録された）は、（滞欧日記——其の二）と付されているが、その目次では（小説）の扱いとなっていない。ではこの二十ページ分のはありのままの事実の記録としていいのか。それとも事実立脚する度合いが強いとしても、小説的な意匠がなされたものなのか。難しい問題だが、その概略を辿りながらこの点を中心にして追究を試みてみたい。

この作品は「上」「中」「下」の三部構成となっている。「上」の冒頭部の五行で、「僅か四五年の間に、希望と光と幸福に充ちて居た画家及其の家庭が暗い憂鬱な裡に葬られたとしたら、人は何んと言

ふて解釈を下す。」とあって、これから語られるカールHという画家の「痛ましき運命」が予告されてしまっている。結末が最初に提示されるのは、同じ号の「白樺」に載った志賀直哉の「濁った頭」（こちらは目次で（小説）と付されている）の場合（この作は粹小説の形式をとり癲狂院を出て半年ほどの「未だ常人とは行かぬ」津田君の告白談がその中身となっている）なら効果的だろうが、「独逸の古羅馬人」の場合、これから時系列に従って語られるカールHという画家へ向ける読み手の関心が著しくそがれてしまう。もっともそれはのちの生馬に自覚され、改稿の際、この冒頭の五行はすべて削除されたのだった。以上のことはともあれ、「自分」は、或る年（明治38年）（これものち削除された）の初秋、一友人の紹介で、南独逸の人カールH氏と知り合いになった。そしてその年の十一月一日、「自分」は「瑞西の二人の画家」とともにカールH氏に招かれたのである。ポポロ広場の情景が叙され、ポポロの門を通過して城外に出、ローザ、ロソリーノという私生児を絞殺した悲しい女工の住んでいた大きなアパートを眺め、化物屋敷と呼ばれている所を改築したH氏の大邸宅を訪れた。サロンは五六十畳敷もある。絵が数枚、壁に掲げられていた。「自分」は「要するに古い形に新しい放逸な感情を盛ろうとする企と見られた。独逸人の血にあふれたる瞑想を古い羅馬人の造った形に托して表はさうとする努力であつた。」と短評を試みたのである。そこにH夫人が突然入って来た。一見して身重と分かったが、その語り口には「安心」が見え、その笑いには「幸福」が看取された。H氏も現れ、やがて楽しい午餐の時を過ごし、そのあとはH氏とともにピラー、マダマを訪れたのだった。その晩の「自分」は、H夫人に芸術家の細君たる誇りを感じ、H氏の雄大な絵に感心し、満足感を覚えたのである。それから二三日して、「額許り大きなB君」に逢った。B君は「君はあんな作品を少しでもいいと思ふのか？何んだあれは芝居の書割同然な看板画だ。」「おまけにあれはウン、エブレオ（猶太人）だぜ！」と貶したのであった。「中」は、それから四年後の十月、巴里でB君と突然出合い、B君からカールH氏のことが八月の「芸術及芸術家」という雑誌に出ていることを知らされるが、四五日後出かけて行った本屋にそれが無かったものの、そこで偶然H氏と出合い、去年の暮れから巴里に住んでいるとして名刺を貰ったことが語られる。「自分」の久しぶりに見たH氏の印象は、その「大家らしい沈重な態度」から「先輩の威」を受けたのであった。「上」から四年後の、舞台を巴里に移してのものだが、「自分」のカールH氏に対する印象に変化はなく、「下」への繋ぎの章の役割を果たしているに過ぎないように思われる。「下」は、急転回する。その年の暮れ、「自分」は急に巴里を離れることになり、H氏に暇乞いに出掛けるが、まずH氏から「今モデルが来て居る。明後木曜日の今頃来て呉れ給ひ。」と言われ、そこに冷淡という以上の「氷つた様な憂鬱」が見え透いて、「不愉快」を覚えたのであった。そして木曜日に訪問した。H夫人は、大きく変わっていて、「悪鬼の相も備へた唯の奥様に早替りして居た」のである。H氏はその父の死で多くの遺産を相続したが、今は羅馬時代の作品は大概捨てたらしい。「自分」が「近頃の画を見せて頂きたいものです。」と所望すると、H氏は渋々それに応じるが、その「二三枚の小さな画」は、「ドラクロアとルノワールを一番多く追想させる画風の作品」に過ぎなかったのである。巴里の新芸術に毒されたとしていいだろう。あの羅馬で生まれたピエトロという可愛らしくて美しい男の子だけが今でも思い返されるという。それから二三日して「額許り大きいB君」に遇った。B君は、H氏に一週

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

間ほど前に会ったと言い、「あの画はなんだ模倣！模写！カール H 氏は死んだ。」「君覚えて居るだろう、羅馬に居た時分立派な画を描いた、実に独創的な立派な画だつた、あんな画の描けた人だつたがねー。」と今の H 氏の画を貶し、羅馬時代のものを褒め懐かしがるのだった。ここで、B 君の「上」の最終部における H 氏の絵に対する評が嫉妬によるものだったと判明するのだ。

以上のような「独逸の古羅馬人」の概要把握から、私は、これは小説としての意匠が十分に施されたものとする。それは B 君の H 氏に対する評が、「上」と「下」の最終部に配置され（そのいずれも「自分」が H 氏に会った「二三日」後となっている）、余りにもタイムリーなこと、平仄を合わせたとみられることから、ここに事実の改変が嗅ぎ取れるからである。そもそも B 君のモデルもはっきりしない。B 君の存在自体が架空のものだった可能性もあるのだ。この作は、雑誌本文で（滞欧日記——其の二）とされていることから、目次では（小説）扱いをされなかっただけのことではなかろうか。ともあれ、「独逸の古羅馬人」は、生馬の実体験をベースにするものの（カール H のモデルは実在したと思う）、小説的な構成の巧みさが認められ、これも秀作の一つと数えたい。

「獣人」（「白樺」明44・8）は、その目次においても（滞欧記その三）と付され、「ボーチュの森」、「独逸の古羅馬人」に連なるもの（二十七ページ分）となっている。これも小説とみるべきかどうかは難しい問題だが、このことを論点の第一に置き、以下しばしその内容を迎えることから始めたい。

冒頭、「瑞西の山で小さなホテルを預つて一ト夏経営をして見ると云ふ友」の「石山」（モデルは岩下家一、生馬の三歳上の学習院同窓）から手紙で「是非来よ」と言って来たのを受け、「二ヶ月瑞西で消夏した事があつた」折のものとされる。「自分」は、ローザンからヴェヴィ、モントローを経過して、グリヨンという停車場でそのホテルを探した。「石君」は喜び迎えてくれ、「学校時代の友達の噂」などをした。新しい客は他の客たちから好奇心で迎えられ、じき皆と親しくなった。それから数日して、チウリツヒからペスタロッツという老夫婦がやって来た。「自分」はあの有名な教育家のペスタロッツと何か関係おありかと尋ねると氏から祖父に当たるという返答を受けた。やがてその娘のティルダもやって来た。が、三四日するうち、この三人の態度に「何んとなく欠けた処」があるのを強く感じるようになる。そしてその「重い気分」を解明出来なかった。こうして「自分」はこのホテルに別れを告げ、ローザンに滞在する。しばらくしてそこから「石山君」はある公用で小アジア方面へ、「自分」はイベルドンへと同時に旅立った。イベルドンにはペスタロッツが最後に経営した小学校があつたが、この町の少年少女の風俗の乱れに驚き、「夫れにしても大ペスタロッツの感化はどうなつたのだ。」と憤慨する。次いでチウリツヒに行き、あのペスタロッツ氏を訪問しようと思いつく。ペスタロッツ夫人から熱心に立ち寄るよう言われていたのである。夫人は生憎留守だったが、氏と娘のティルダが出迎えてくれた。氏は部屋にある祖父の遺品などを見せてくれた。茶を頂いていたら、何かの呻り声を聞いた。「自分」は「家中を見せて貰ひたい」と申し出た。二人は案内の先に立った。食堂でまたさっきの呻り声を聞き、ついに食堂からベランダに出る戸から「猿の様な黒いもの」が現れた。その「黒い物」は、丈三尺ほどの円く肥った熊の子のような怪物で、氏の次男であつたのだ。「黒い物」は、檻に入れられたが、氏は「吾々はこんな片輪を子に持つて、幸福には決してなれません。」と嘆き、涙を落としたのである。その晩から「自分」は夢で「物」（傍点は作者）

に襲われた。三四日すると夢も見ることがなくなったが、「然し今日尚ほ冷静に人の一生を考へようとする場合、厳かな自然の掟として其時の事を思ひ出す。」(のちこの部分は「然し折にふれて未だ其場の物凄さは思ひ出すのである。」とすっきりしたものに改変している)として結んでいる。

この「獣人」は、「ボーデュの森」同様、『蝙蝠の如く』にも『獣人』にも収録された。初期生馬の代表作とされていたとしていい。鈴木三重吉は、「材料の特殊なる点に於いて最愕くべき作品である。」として、その後半部のスリリングな展開に驚嘆を禁じえなかったことを述べている。が、これが事実かどうかの穿鑿はない。本多秋五になると、「これも滞欧記念の文学作品の一つだが、この方は小説を書くという意識が強くなって、事件らしいものがある。」(前掲書の「解題」より)としている。本多の短評にはこの作を虚構とみる直感が働いているようにも思える。私にも、この作の筋の展開のあり方から虚構の操作の跡が感じられるのだ。まず、瑞西のホテルにペスタロッツ夫人がひどい顔の火傷の包帯姿(赤く爛れて眉毛が無くなっている)で現れるのがいかにものちの伏線めいていて、リアリティーに欠けるように思われる。しかも「自分」にチウリツヒの自宅に熱心に立ち寄るように勧めるということは有り得ないように思える。全体的にペスタロッツ夫妻に一家のいわば恥部(次男の存在)を隠そうという意識が乏しいのも現実的ではないだろう。また、チウリツヒのペスタロッツ家を訪れた「自分」は、好奇心からとはいえ家中を全部見せて貰いたいと申し出るなどはかなり図々しくなっていて、最終のクライマックスに強引に連ぼうとする作爲を感じる。むろんこう言うのは、再読を重ねた上でのことである。初発の読後の感想は、鈴木三重吉と同じように、とりわけその後半部のスリリングな展開と題材の奇抜さに驚かされたのである。とはいえ、ペスタロッツの子孫の現実はいかなるものか私は知らない。あるいは当時、瑞西で噂として巷間広まっていたものを、生馬が創作にまで仕立て上げたものなのか。謎は解けないが、「獣人」は、その衝撃的な内容でやはり初期生馬の代表作の一つと言えるだろう。が、「獣人」の現代性を問えば、その内容は人権問題に明らかに抵触し、文学として長い星霜に耐えうるものではないだろう。

三

「蝙蝠の如く」(「白樺」, 明44・11, 12, 明45・3, 6, 7, 大元・9, 12)は、生馬(まだその署名は壬生馬)の力作長篇である。目次では明治44年11月号は、(滞欧日記)とされているが、次の明治44年12月号は(小説)とされ、明治45年7月号および9月号でも(小説)となっている。また、作中の岩井君のモデルは増井清次郎だが、のちに「岩井君」に宛て「君の過去から僕は此材料の大体を蒐めた。然し性格や、心持は全く勝手に生み出した架空の一青年の夫れに過ぎない。」としていることから、この作は小説だと規定できるのである。では、この作の紹介と論評を試みてみよう。

全体の構成は、「自分」と岩井君が七月上旬に羅馬からロッカ・デ・パーパに避暑に出掛けそこの生活を語り羅馬に帰るまでをその現在時とするが、途中二度に分けて岩井君の波乱万丈の身の上話が入れ子のように入っている、というものとなっている。二つの時間軸の存在、いわば重層性を持つ小説構造であることは、読み手の興味や好奇心をそそる機能を果たしていて、これは優れた小説技法

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

だったとしてよいだろう。

その冒頭部は、「羅馬の中央停車場」周辺の光景を叙述している。昔の大浴場の一部である広場には、古煉瓦塀の「天使の聖母寺院」(サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会)があり、それと対照をなすのが「広場の中央の大噴水」(ナーイアデスの噴水)だとされる。噴水は「四人の裸体の女」に囲まれていて、その四体の銅像は「今の作」(扇情的なポーズをとっている)ので道徳的問題ありという意見もあったが1901年に強引に除幕式が行なわれてしまったという)とされる。つまりこちらは二十世紀の新しい時代の象徴といえるのだ。このような冒頭部分の意味にこだわれば、あとの展開からして、古い「天使の聖母寺院」の外壁に代表されるのは岩井君の過去(あるいはその故国日本への想い)ということになり、噴水を囲む「四人の裸体の女」の像は今現在の岩井君(あるいはその庇護者のG侯爵夫人)を象徴するということになるだろう。

こうして、七月初旬の青空の朝、「吾々の馬車」が停車場に着く。「吾々」とは、「自分」と岩井と侯爵夫人である。侯爵夫人の説明が若干なされている。第一の夫はG侯爵だが、その人は夭折した。未亡人となって伊太利革命の舞台で活躍したが、数知れない男たちとの「浮名」を立てたという。今、「自分」と岩井は、ロッカ・デ・パーパに旅立つ。侯爵夫人は見送りに来ただけであり、岩井と夫人の関係に関する「いまはしい評判」については「自分」は努めてそれを否定するのだった。列車は動き出し、羅馬の古蹟に沿って走る。岩井は「九年」羅馬にいるが、今「神経系統」の「病氣」を患っていて、それを癒す目的でロッカ・デ・パーパに行くのだと言う。終点のフラスカーチで降り、「ガタクリ馬車」に三時間ほど乗り、ロッカ・デ・パーパに到着した。「自分」と岩井は画家である。少しびっこをひく岩井はマッソリーニという乞食の児を小使いにして画道具を運ばせたりした。岩井の近所のお嬢さんたちとの如才ない振る舞いも目撃した。が、或る夜、岩井が恐ろしい夢(姉が女郎になっている)を見たとして泣いていた。その折、岩井は「私は八度手から手に金で売り渡され」と言った。こうして「自分」は岩井君の纏った身の上話を所望し、岩井の過去が語られるのである。岩井は大阪で生まれ育った感じだが、両親を早くに亡くし、姉と二人で乞食になったが、人攫いにあったのだろう、二人は別々になり、岩井少年は角兵衛獅子の一人になっていた。二三年、角兵衛で歩いたが、やがて曲馬団に入れられ、逆立ちや玉乗りや綱渡りをやっていた。そこでは一座の花形浜路太夫に可愛がられた。次に、別の一団に入れられ、或る港から船に乗せられたのであった。その岩井の語りには「懐旧と望郷の情」が籠もっていたという。

以上が「白樺」連載の一回目であり、巻頭に掲載された三十八ページ分のものであった。作品の現在時は、作中で「自分」が日本からの通信で「日本海々戦の報知」を受けているので、明治38年のことだと察せられる。一見ならかな書き出しだが、暗示に富むことは先に述べた通りである。岩井の過去が語られ、それが読み手の同情を喚起させるものだけに俄然興味がそそられていく。

岩井少年と花ちゃんという九つほどの女の児らを乗せた船はどうやら軍需品の密輸入をしていたものらしい。ここで現在の岩井はどこでも表面と裏面の世界があることを語る。で、その船が着いたのは桑港あたりだったとされる。異人たちが異様に映り、「故郷懐しく」、失望したという。が、興行は当たった。森という親方が岩井を百円で買ったのだが、この人はただの芸人で、そこには山田という

書記のような若い男がいて、勉強家で人格者、のちに比較人類学者になったという。一行は、ナイアガラからシカゴ、セント・ルイを経て、南米に渡った。リオ・ド・ヂャネロで大事件が起こった。伊太利亜曲馬師の一组が合併して、二ヶ月も興行した。この折、アデーレ（のちアーデレと直される）という西班牙生まれの「火性な女」が仲間に入り込み、リオを引き払う時はもう森の情婦になっていた。山田らが離れてのちの一座は、モンテビデオからブエノザイレスに行った。が、ここではうまく行かず、森とアデーレ、岩井と花ちゃんの四人になってしまった。それでもリスボンに上陸し、可愛い二人の芸は相当に受けたのだという。こういう長い話を聞いた次の日、「自分」は昨晚からの腹痛を寝台で癒していたが、岩井はその不在を詫び、よく面倒をみてくれたのだった。

以上は「白樺」連載二回目で、十六ページ分である。岩井少年の曲馬団員としての流転の人生（陰の世界）は話し半ばだが、波乱に富み、読み手の誰をも厭きさせないものがある。また、この時代に山田という特異な人物がいたこと、アデーレという「火性な女」の登場など、「白樺」同人たちでも好奇の眼で読んだに相違ないと想像できるのだ。

聖母昇天祭の前日、T 未亡人とその娘のルイザがロッカ・デ・パーパに到着した。真っ先に岩井が応対し、夕食のあとは滞在客皆でカルタ遊びをしたり、舞踏を始めたのだった。聖母昇天祭の当日も晴天で、オノラビレ C という人から岩井に送られて来た沢山の風船を飛ばし、行列を迎え、村人たちは昇天祭を祝ったのである。T 親子が羅馬に帰ったあと、岩井の師事する画の先生である F 教授が訪ねて来た。六十近い禿頭の F 先生は、印象派を嫌っていたが、いつも髻剃りの際に剃刀で顔を傷つけること、帰る時に、やれ帽子を忘れたの、傘を忘れたのと慌てた様はユーモアさえ醸していた。こうして「自分」は、また岩井の「身上話」を聞こうと二人で森に入って行ったのである。

以上が「白樺」連載三回目で、二十一ページ分となっている。ロッカ・デ・パーパでの聖母昇天祭を中心とした現在時が語られたが、私には F 教授のキャラクターがとりわけ印象に残った。のどかな避暑地の日々の展開としてあり、先の岩井の「身上話」とは異質な時空間を感じさせている。

草の上で岩井は仰向けに寝たままその「身上話」のつづきを始めた。初恋の話となる。ブエノザイレスにいた時分、岩井少年は、ビール製造所の役人の娘で純粋な独逸人の九つほどの美しい子に恋した。子どもの恋は他愛なく、別れ際には接吻するまでになったという。今はその子も母になっていようと岩井にとっての「一生涯の一番幸福な時」を懐かしがるのだった。西班牙から伊太利の北、トリノに来て、「私の生涯の大曲折になる出来事」に遭ったという。綱の張り方が悪かったせいか、岩井少年は十メートルの高さから真っ逆様に落ちた。右足が使いものにならなくなるが、一行四人は羅馬に直行した。足の傷が悪化して動けなくなっていたが、とりわけアデーレの折檻は熾烈を極めた。が、宿の主人の見かねての密告により警察官らによって助けられたのだった。そのなかに当時貴族院議員のオノラビレ C がいたのである。こうして岩井の境遇は激変した。入院して大手術をしたが、その折、二十四五の美しいソレルラ・ベアトリチエという尼さんが介抱してくれた。そこでこの尼さんに恋したのである。オノラビレ C は毎日のように病室に来てくれて、その恋人の侯爵夫人（目をかけていた文学書生のダヌンチオが夫人の一人娘と出奔しゴタゴタつづきだった）とも知り合い、以後夫人から伊太利文学の初歩や羅馬史などを授かったという。こうして岩井少年は「半年の間」に、

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

「奴隷から市民になり、文盲から有筆者になり、中性から男になり、死から蘇生して」いたのだった。

以上が「白樺」連載四回目で、十三ページ分である。ここはこの作品のクライマックス部分としていいだろう。アデーレからの死を覚悟するほどの虐待の苦しみ、そこから一転しての侯爵夫人の庇護下に置かれるまで（いわば陽の世界）が語られた。が、フエノザイレスでの岩井少年の初恋の話、生死の境をさまよったあとの岩井少年を優しく看護してくれた尼さんのこと、この二つのエピソードは清らかなものであり、特別に印象に残るのである。

その後、岩井少年は、弁護士（今は商工務大臣）のN氏の家に預けられた。裁判では勝ち、森夫婦は罰せられた。が、今では消息不明の森夫婦と花ちゃんについて、現在の岩井は、「矢張り懐しいかもしれませんね、あんな苦しい時代でも今よりは、まだと思ふ事があるのですから……」と言ったりしたのである。その後の岩井少年は周囲の人たちの醵金で学問が出来るようになった。小・中学校ではよく励み、人の十年かかるところを六年で済ましたという。夫人やオノラビレCの信用は厚く、あたかも実子のようにしてくれ、かなりの財産まで出来たのだった。そういう或る折、姉の消息を知る。姉のおのう（佐々木姓になっていた）は、海外での弟（良次）の出世を知ったのである。その後、オノラビレは相場に手を出し破産し、それから侯爵夫人が一切の世話をしてくれるようになったという。また岩井は、過度の勉強のせいか「今の病氣」（神経衰弱）にかかり、リチエオ（高等学校）を断念して絵画を専修することにしたのだという。こうして岩井はその重い身体を草の中から起こした。

以上が「白樺」連載五回目で、九ページ分に過ぎない。これで岩井の長い「身上話」が終る。ここでは、森夫婦や妹分の花ちゃんとの生活がそれでも懐かしく、今よりはまだと思うことがあるという今現在の岩井の発言が大変気にかかる。また、過度の勉強のせいとされる「今の病氣」（神経系のもの）も、他にも原因があるのではないかと勘ぐりたくなる。それは一つには伯爵夫人との関係が明確にされないからかもしれない。が、ともあれ、異郷の地で生きなければならなくなった岩井の数奇な運命の物語は、読み手の好奇心をひき、胸を打つこと多大であったのである。

「再び写生を始め出した。」の一文で始まる。アルバノ湖が遠い脚下に水をたたえている。この湖は伯爵家の領地という。二人は写生した。ある日のこと、葡萄酒が欲しくなって僧院に行ったが、僧院の老番人は日本のことをほとんど知らなかった。その折、岩井は日本を世界の一等国だと繰り返したのだった。二人は写生を終え、帰路は驢馬に乗って競争した。「自分」の方にマッソリーノが飛び乗ったが、しがみつかれてくすぐったくてたまらない。くすぐったいという伊太利語を知らない。そのうち二人とも地上に投げ出された。それを岩井に尋ねると、「solleticare」を区切りながら言った。

以上が「白樺」連載六回目で、わずか七ページ分に過ぎない。が、写生に出掛けたこの日の、くすぐったいに関わるエピソードはほほえましいものと感じられた。

八月の半ばに「自分」は思いがけない平田（モデルは不詳）の訪問を受けた。彼は南米アルゼンチンで事業を起こすらしい。彼は精しく日本海海戦の話を聞かせてくれた。が、岩井にはその話の半分以上は分からず、その愛国的名誉心が傷つけられたのだろうか、元気がなかった。或る午後、三人が皇后陛下エレナの侍女をしているウンベンタGという令嬢の招待を受けたこともあった。「自分」が

平田を見送りに羅馬に行き、ロッカに戻ると広場ではチルコの興行の一座が来ていた。岩井は不眠症になったと言ひ、一旦羅馬に帰り、またよくなって戻って来た。しかし八月の末、山の生活に厭きてきた二人は羅馬に帰ることにした。暁の四時、二人は馬車に乗りロッカ・デ・パーバを出発した。途中で薫肉を買い馬車の御者台の中に隠し、なんとか関税兵の目を逃れ、羅馬市中に入ったのだった。

以上が「白樺」連載の最終七回目で、二十一ページ分である。ここでは、岩井が漢語の多い平田の日本海海戦の話を半分以上理解できず、ある種の疎外感を感じたことが注目される。多くの人々には岩井は「運命の寵児」として幸福そうに見えるだろうが、故国日本を愛するも日本人たりえない彼の今の存在に苦しんでいるその内面の真実を見なければならないのである。多少のスリルを感じさせる羅馬への帰路の旅も面白い。読後に爽やかさを残している。

「蝙蝠の如く」(合計百二十三ページ分)は、やはり力作長篇といえる。一見のどかに感じられるロッカ・デ・パーバのひと夏の時間の流れのなかに、岩井の波乱万丈の過去が語られるという作品構成のあり方も巧妙である。そして岩井がいわば陰の世界にも陽の世界にもその居場所を定めきれていないことを発見するのである。生馬がその第一創作集の総タイトル名にこれを選択したのもよく理解できるように思う。もっと深く研究がなされてもいい作品で、私は高く評価したい。

四

「ゴンドラの一夜」(「美術新報」, 大元・11)は、「白樺」誌上の発表ではないが、第一創作集『蝙蝠の如く』(大2・2)にも第二創作集『獣人』(大4・6)にも収録されているので、看過するわけにはいかない。しかも鈴木三重吉は、「ヴェネチアの水街に女の、ゴンドラを追うてさまよふ一と夜を写した、音楽ともまがふべき絶好の小品である。」と高く評価している。そういうわけで、この作品(初出誌未見のため、『有島生馬全集第1巻』(昭7・12, 改造社)所収のものをテキストとして使用する)を仔細に見ていきたい。

十月末のヴェネチア。細い雨が降っている。「二人」は外出できるぐらいの雨なので宿屋から出る。「二人」とは誰と誰なのか明示していない。サン・マルコ広場に出る。「神秘的なサン・マルコ寺院は実に近東趣味の寺院建築として偉大な傑作である。」としている。近くのカフェに入り、外廊の往来に腰掛け、広場の雨を見る。カフェを出てドーチェの宮殿の方へ歩いていく。一人がゴンドラに乗って見たいと言ひ出し、もう一人も異存のない、いい晩になった。舟は徐かに動き出した。初めて乗ったその愉快さは憧れ以上であった。アー・エー、アー・エーというゴンドリエーリの声、水に落ちる櫂の音などに旅情を味わった。ゴンドリエーリが歌を唄うのは遠い昔の事だった。操縦術も巧みである。三四艘のゴンドラが泊まっていたので「二人」の乗る舟はいきなり停まった。二つの影があって、一人は三十位の黒い髪の女、一人は十七八のブロンドの女である。二人の女は舟に乗って流れていく。一人がこんな詩を思い出すのではないかとって、原文16行が示された。一人は立ち上がって美女を乗せたゴンドラを追えと命じた。カナール・グラデに出て、ポンテ・ディ・リアトルの方へ進む。橋の下には夜霧が下りている。月光の光は弱い。橋の影に別に二艘のゴンドラがいた。追われる

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

ゴンドラのあとを追うようにその二艘が動き出した。マンドリーノとギターラに合わせて小声で唄って行くらしかった。都合四艘のゴンドラは競走のように進んでいく。美人のゴンドラは或る宮殿前で停まった。二人の女は降りていく。女の一人が突然振り返って、「お上手な奏楽のお蔭で、面白う御座いましたわ」といった意味のことを告げて微笑した。マンドリーノとギターラのゴンドラの男は立ち上がって、帽子をとって丁寧に辞儀をした。女は「左様なら。皆様、お休みなさい!」と言った。男たちは唄を所望したが無益だった。夜更けて、サン・マルコ広場近くまで帰るゴンドラは夢より淡かった。

味わい深い、いい作品である。夢幻のような世界が展開された。「二人」とのみ記し、固有名を示さないのがいい。女二人も影絵のように描かれる。マンドリーノとギターラに合わせた唄ということで男たちの姿を描写しないのもいい。ヴェネチアの秋の夕暮れから夜の素晴らしい風物詩である。

「ライン河に沿ひて」(「白樺」, 大2・4, この作から署名は生馬となる) は、これも生馬の滞欧体験がベースになったものだが、目次では(小説)とされ、その巻頭(三十二ページ分)に置かれた。

冒頭の但し書きで、これは、「瑞西の或る田舎町」の「美術家を中心になつて居る一つの団体」を描こうとしたものとされる。シヤフハウゼンの町が舞台で、「自分」の目覚めから始まり、オグスト、エムマのお母さん、リリンスキー、フエルナンドらが次々と集まり、今しもライン河に沿った「遠足」に出掛けようとする様が描かれる。「吾々七人」を乗せた船内はまだ広すぎたという。川上にあるデイセンハウゼン村ではオグストの両親や弟が出迎えた。オグストが先導する「同勢十幾人」は、笑い興じ橋を渡り、独逸の岸に沿って川上へ進んだ。少しも人を恐れない兎に出会ったり、昼食をとってから寺院などを見廻ったりして、再び瑞西国内に帰って来た。オグストは友人の家に皆を招待した。やがてそこの主人のフキリツプが「自殺共謀者になつた」話を皆にせがまれて話し出す。それは「彼是れ二十年」も前のことだという。彼とSという男が、水死しかけの二十四五の女を救った。が、女はその姉と一人の男をめぐる不徳の關係の果ての覺悟の自殺だったとして、再び水に葬ってくれと言った。二人は女の意志を尊重し、女を水に沈めたのだという。この話を聞いた一行に賛否両論の議論が沸き起こった。「日本人」の「自分」にも意見が求められた。それからは「自分」の説への賛否へと論争は一転した。長居をし家を出るが、皆言葉少なく歩いた。シヤフハウゼンには鉄道で向かった。

前半は、スケッチ風のなだらかな筆致で仲間たちとの「遠足」が綴られ、事件らしい事件も起こらない。が、後半からは、フキリツプの自殺補助の話が語られ、それをめぐる議論に花が咲くという展開となった。「自分」の意見は、ケース・バイ・ケースで、直感的判断を自然とするというものだった。おそらく生馬は実際にこのような議論に参加したことがあったのだろう。が、それがこの日の「遠足」の折のものだったとは断定できまい。全体的に起伏のある展開になるような小説的な処置が加えられたものか。ともあれ、愉快に穏やかに進行する或る日の仲間たちとの「遠足」のなかに、若い男女の纏れた愛欲の果ての刺激的な三角關係の物語が突如語られ、次いでそれをめぐっての仲間たちに議論が交わされるという、メリハリの効いた趣向のうまい佳品として高く評価したいと思う。

通例、初期「白樺」、あるいは前期「白樺」時代といった場合、明治43年から大正2年末とされる

(本多秋五「白樺」派の輪郭) (『文芸』, 昭25・3) など)。が、生馬の大正三年、「白樺」誌上に発表された三つの作品は、その滞欧体験の所産であり、それまでの作品から大きな作風の変化も認められないので、私はそれらも初期作品として扱いたいと思う。

「ピザの少女」(『白樺』, 大3・4) は、その目次上では(小説)とされていない(同号掲載の志賀直哉の「兎を盗む話」や里見弴の「少年の嘘」などは(小説)とされている)。それは、「僕」(生馬自身とみていい)が「君」(東京にいる友を想定していい)に宛てた書簡体形式の、二十ページ分のものである。虚構化の有無を考える上でもその内容の要点を把握してみたい。

「三月七日、朝。」より「僕」という一人称で語られ、今ゼノブの町にいて、まずは「四年目で伊太利へ帰つて来」(明治42年に当たる)、伊太利がいかに優れているかを認識したことをいう。そして昨晚、偶然知り合った日本人のy君らと夕食をとにした英国人夫婦のこと、とりわけその外見とは裏腹にいかにも「日本婦人」としか思われぬ日本で生まれ育ったというその英国人夫人(今初めて本国に帰る旅の途次だという)の印象を語っている。「三月八日、夜。」「三月九日、朝。」「三月十日朝、」は、ピザの町に到着しての感慨、ピザの斜塔の見物、その解説が中心をなしているが、かつてこのホテルに半年余りも一人で暮らしていたという若い「日本婦人」のこと(その名を清子といい、G伯という大使館付海軍少佐に連れられリボルノに来たが、やがて八歳になる娘のアントワネットを尼院の寄宿舎に預け、G伯の裏切りのせいか、その永眠が伝えられたという)も語られている。そして「三月十日、夜。」では、「僕」がサンタカテリーナの尼院を訪ね、成長した混血児のアントワネットを見つけ出したことを語り、「日本人の血の一滴が伊太利人の中へ投げ入れられて、永遠に見分ち難くなりつゝある」という感慨を記しているのである。

上記のようなこの作には、なんらの小説的趣向も施されていないのであろうか。ゼノブのホテルで出会った立派に日本語を話すまさしく「日本婦人」というべく英国人夫人と、かつてその悲しい生涯を異郷の地で閉じねばならなかった「日本婦人」とは、明らかな対照を形成している。そこに、これは単なるピザ紀行を中心とした見聞録の類ではないと思う根拠がある。私はこの作に何らかの虚構や潤色を感じてならない。作の出来栄は、最終部のアントワネットへの焦点化までに冗長さが感じられ、そう高くは評価できないもののように思われる。

「美少年」(『白樺』, 大3・9) は、その目次上でも(小説)とされている、二十五ページ分のものである。これも生馬の滞欧体験をベースにしている。

その冒頭部は、「自分」がこの「七月」(大正3年としていい)、書架から洪牙利語で書かれた「解剖図」を取り出し、「別れて久しい彼の事」を考え、それから二週間ほどのちに「彼」、すなわちヴァンベルスキーから書留郵便を貰ったことを語り、「八月」の避暑の折、全欧の大戦(第一次世界大戦)が起こったことを知って、従軍せねばならないだろう「彼」との昔の記憶を喚起するということが書かれている。「自分」は、羅馬の国立美術学校に設けてある自由教室でヴァンベルスキーと知り合った。彼は、洪牙利の二十歳位の小柄な美少年で、日本に夢を持っていた。それからシエベックやペンジャンスキー、大男のウブラジン、モギン、カニツキらの洪牙利の友を得たのだった。彼らとの大蒜の強い肉汁鍋を囲んだ酒宴があったことも回想される。ヴァンベルスキーとは互いの下宿を訪ねた

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

りしたが、「自分」は一卷の江戸錦絵をヴァンベルスキーに与え、彼は例の「解剖図」を与え、そのまま別れてしまったのだった。

この作の生馬は、全欧の大戦の報を受け、あるいはあまりにタイムリー過ぎるヴァンベルスキーからの手紙などは虚構として構想したのかもしれない。が、その回想による滞欧体験のいわば青春のひと餉ひと餉は多く事実に基づくものと思われる。ともあれ、ヴァンベルスキーをはじめとした洪牙利の画学生たちとの交流には青春独特の息吹が感じられ、なかなかの佳作だとなしたい。

「獅子ウブラジンとエレル老人」（「白樺」大3・10）は、前作「美少年」の一脇役で出てきたウブラジンが主人公格として登場していて、前作の姉妹篇のような感じを与えている。が、目次上では（小説）とされていない。事実に即した点が多いための処置なのか判然としないが、二十七ページ分のこの作の内容は次のようなものである。

「自分」がボルゲーゼ公園の林の奥で読書をしていると、ウブラジンも傍に来ていた。彼にヴァンベルスキーの消息を尋ね、次第に絵画の話となり、やがてウブラジンの生活に焦点が当てられていく。ウブラジンは、洪牙利政府の留学生で、ヴェネチア宮殿の三部屋を独占して寄宿していた。「自分」はその画室にエレル老人をモデルとした肖像画を発見する。ウブラジンとサビイナという若い女性との恋愛談も語られるが、エレル老人に関する方へと話は展開していく。「自分」とウブラジンは、それぞれ別の機会にエレル老人（一時は有力な美術批評家だったが今は酒に溺れ落ちぶれている）と知り合いになっていた。そして今、ウブラジンは、エレル老人がフオン・ミスコレエツ伯爵の一人息子に当たるのではないかと察知していたのだった。様々な婦人と関係した故ミスコレエツ伯爵だが、その累は爵位した息子の結婚にまで及び、息子はその不義の噂の立った（実は無実らしい）夫人を謀殺してその姿を消したのだという。ウブラジンはエレル老人をミスコレエツ伯に相違ないとする疑惑から解放されなかったが、「自分」はそれを断言し得るのではないとして締めくくっている。

この作は筋の展開がうまいと思った。ウブラジンと「自分」、「自分」とエレル、エレルとウブラジンの関係がコンパクトに纏められて進展しているのがよい。また、ウブラジンとサビイナの恋愛のエピソードも印象的である。が、洪牙利のプレスブルクの町に起こったミスコレエツ伯爵親子に関わるどろどろとした人間ドラマはさらに印象深い。もっともこの種の刺激的な挿話が入るのは初期生馬作品の特徴かもしれない。ともあれ私には、その衝撃的展開、謎を残す結末のあり方に小説的な味付けも加えられていたのではないかと感じられるのである。

五

里見弴といえば、今日でも小説家としてその名は多くの人々に知られていると思う。が、弴に関する本格的な評論や研究の類は皆無という現状にある。個人的にはもっと見直され再評価されてよい作家だとみる。その端緒を開くためにも、本稿はその初期の文学作品（小説）にスポットを当ててみようとするものである。が、まずは、その生い立ちから「白樺」創刊（明43・4）時までの歩みを簡単に見ておこう。

里見弴は、明治21年7月14日、父有島武（48歳）、母幸（36歳）の四男として、横浜市月岡町の横浜税関長官舎で生まれた。兄武郎の十歳下、兄壬生馬（生馬）の六歳下である。本名は山内英夫というが、それはこの年の11月1日付で母方の山内家の養子となり、山内家を継いだからである。ただし、母方の祖母静は有島家に寄寓、英夫はひきつづいて有島家で育てられたのだった。明治29年1月、赤坂の仲ノ町小学校に入学、4月に番町小学校に転校、12月に学習院初等科3年級に編入した。明治33年、学習院中等科にすすむ。この頃から兄壬生馬やその友人の志賀直哉の影響を受け始め、やがて兄壬生馬や志賀らの睦友会を真似て兎島喜久雄らと絢友会をつくった。先行作家では泉鏡花に傾倒していた。兄壬生馬がその洋行に際し（明治38年）、弟弴の後見を志賀に託したことから、以後弴は志賀の影響を強く受けることになる。明治41年春には志賀直哉、木下利玄と関西に旅行し「寺の瓦」という紀行文集を作成、10月には、田中治之助（雨村）、正親町實慶（日下諒）、中村貫之、園池公致、兎島喜久雄、菅田敏光らと回覧雑誌「麦」を発行した。この「麦」は、先輩の志賀直哉、武者小路実篤、木下利玄、正親町公和の回覧雑誌「望野」に刺激を受けて出されたもので、月二回で一年間つづいた。明治42年7月、学習院高等科を卒業、9月、東京帝国大学（英文科）に入学したが、間もなく退学した。こうして明治43年4月スタートの「白樺」に参加し、翻訳（「白樺」創刊号にチェーホフの「親族会議」を発表など）、翻訳詩（ワイルドやピアズレーのもの）、小説、詩、小話などを発表していったのである。本稿では、もっぱらその小説作品の論評を試みるが、その論評対象は、生馬の場合と同じく大正三年までとする。なぜなら、弴の場合、この年の八月をもってそれ以降「白樺」に作品を発表しなくなるからである。繰り返しになるが、弴の初期作品への評論や研究は実に乏しい現状にあるので、勢い私流の紹介と論評が中心となる。

六

「お民さん」（「白樺」、明43・6）は、目次で（小説）とされた、わずか十ページ分のものである。

主人公の「私」はその姉の婚礼の時、姉婿の従妹に当たるお民さんと初対面をした。「私」が「十五」で、「紅い着物」を着て「稚児輪」に髪を結ったお民さんは「十二位」だった。お民さんの姿を見て、美しく、可愛い人と思ったが、恋とはいえず、ただ親類になるのが嬉しかった。その後は、年に一度の正月に親類が皆集まっての「新年宴会と云ふやうな事」をする折にしか会えなかった。が、この会合も「三年程」続いて立ち消えになってしまった。さらに「三年」経ち、「私」が「二十一」の時、一人で出掛けた歌舞伎座で偶然お民さんが加藤の叔父と叔母、その娘のお辰さんと来ているのを目にした。お民さんは「もう十八位」になっていて「銀杏返し」がよく似合い、可愛かった豊かな頬は娘らしく引き締まって面長に見せていた。「恋女房染分手綱」の三吉子別れのシーンに泣いているお民さんを見て、「私」も涙を浮かべた。お民さんが「夙く母親に別れた人」だと知っていたので殊更だった。この時から「私」の空想や夢の裡にお民さんが現れるようになった。それから三四ヶ月後、縁談の決まった加藤のお辰さんとの冗談のような会話からお民さんへの思いが募らされたこともあった。その夏休みに鎌倉の姉の別荘に出掛けた折は、渚での「白地の単衣」を着たお民さんのお辞

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

儀に「いかにも子供らしい、アートルスな所」（傍点は作者）を感じ、うきうきした心持になったのだった。がその後、「私の予期」は実現することなく、その翌年の三月、お民さんは前年の夏鎌倉海岸で遇った「見識^{みしち}ぬ三十前後の男」と結婚したと聞き、「苦笑」せざるを得なかった。その一ト月後、お民さんの長兄が独逸から帰って来て、その歓迎の宴に出た。お民さんもお辰さんも「丸鬚」で来ていたが、お民さんは長兄に「私」を紹介したあとの食後の座談の話のなかに昔の「新年会の事」を話題にしていた。その夜の「私」は、「淡い恋の記憶」を繰り返し、お民さんは「私」に対する「恋の残骸を抱いて父の欲する人に嫁したのだ」と独断したのだった。が、この解釈は永く「私」の心に満足を与え得ず、「解く事の出来ない謎」として残ったという。その後、女というものを識った「私」は、なんとも「虫のいゝ解釈」をしていたに過ぎない、「自分の稚氣」を笑わない訳にはいかなかったとしている。

この作は、主人公「私」のお民さんとの思い出に焦点を当て、その無駄な部分のない一貫性のある話の運び方がよいと思った。その主題は、主人公の、片親に育てられたといういわばハンディのあるお民さんへの「淡い恋」におけるかつての折々の思いと「今日」からの解釈の落差にあるといえるだろう。このような一人相撲の恋は若さゆえのものであり普遍性のあるものと思う。お民さんにモデルが存在したかどうかは分からないが、その着物や髪型の変化に細かい描写の巧みさが窺えた。

そもそもこの作は回覧雑誌「麦」に発表されたものであった。志賀直哉の評を引用すれば、「柳がホメてゐたから、予期の為めに失望しなければいゝがと思ひながら先づ此小説から見た。所が少しも失望しなかつた。」とまずは褒め、「主人公があゝ解してゐるのは大変いゝが作者は「然し其解釈は当たつてゐないやうだ」と思つてもらいたかつた。」という注文もつけている（〔回覧雑誌「麦」批評欄より〕）。この志賀の評から察するに、「麦」時代のものはあるいはラストの「今日」からの解釈を示した部分が書かれていなかったのかもしれない。それは「麦」第十四号掲載だから明治42年5月のものと推測されるが、弾は多くの仲間たちからの評を参考に書き直し、小説としてのいわば文壇処女作として「白樺」誌上に自信を持って発表したのだと思われる。

「一目惚」（「黒潮」、大7、2）は、「高等科三年時代の私たち仲間の廻覧誌「麦」に載せたもので、実際には、「お民さん」ではなく、この方を処女作と呼ぶべきだ。」、 「初出の題名は「梨本にて」で、今では憶えてゐる人も少いらしい中伊豆の村の、谷川沿ひの温泉宿に、中等初年級の友だち数人と一泊した時の、日記も同然の小品だ。」（『里見淳全集 第二巻』の「あとがき」より、筑摩書房、昭52・12）とされているので、ここで扱うことにする。まずはその概略を捉えておこう。

うちには殆ど一軒も親類がなく、男ばかりの兄弟で、子供の遊びも戦ごっこに限られ、それでも可愛らしい子供が年上の女にいとしがられる筋の鏡花の小説を読んだりしたが、薩摩隼人の心持を失わなかった時分の頃（十六の年）の「ひと目で恋をした話」だと前置きされる。春休暇に二三人の友達と伊豆半島を旅行し、梨本という温泉村にたどり着いたのは「薄ら寒い日暮方」だった。「私」は一番おしまいに遅れて歩いていたら、郵便局のはずれの所に「嬰兒^{あかんぼ}を背負^{おぶ}つた若い女」が立っていた。「私」は偶然にもその女の顔を殆どあらゆる角度において眺めることが出来た。時間にしたら三十秒間ほどのものだが、網膜に焼きついてしまう。それは「私の好きな女そのもの」、「私の理想の顔だち」

だった。ある種の都会人に見るような浅黒い肌。薄肉でしまっている。やや太めの黒い尻下りの眉、大きな目。素直な癖のない鼻。薄手な唇をキリリと結んだ口もと。年は十九か二十歳、実は十七八とも見られた。処女らしい肉づきの中背などなど。とにかく、ひと目見て「すぐ電気に^う撃たれたやうにハツとし」た。胸の高なり。彼女からその後姿を見られているという確信はあったが、引き返すほどの勇氣はなかった。それからは恋に悩む少年となった。空想の広がり³で片恋は培われていった。余談として、その晩、浦島太郎と話をした。浦島太郎は本当は亀を助けたのではなく縁日で買って来たのだと言った。一生涯、「梨本の女」と呑気な浦島太郎の夢を時折思い出すだろうとして締めくくっている。

この作の原型作「梨本にて」は、回覧雑誌「麦」の第二号（明治41年11月）に発表されたものである。それについて志賀直哉は、「予期がかなりあつたにかゝらず面白く読むだ。殆ど非難する所がない」といい、その「成功」の理由として、その第一に“‘One glance love’”といふ、恋の中でも、余り人が書かぬ、しかも誰でもが経験する感じの深い恋に材料を取つたといふ事を挙げ、第二に「態度」のよいこと（二年前の主人公と二年後の作者の態度の調和のよさを言っている）、第三に「文章」のよいことを言い、激賞に近い評をしている。が、なぜかその発表は遅れてしまった。先の弾の回想や志賀評から察するに、「梨本にて」は、主人公を「自分」としてその小説の現在時と回想部には二年の隔たりしかない「日記も同然の小品」に過ぎなかったものと考えられる。が、「一目惚」になると、まずは主人公「私」の境遇に作者とは若干異なる潤色や虚構（親類が一軒もないとか男ばかりの兄弟で成育したこと）が付加された。さらに、余談の浦島太郎の夢でこの作のテーマたりうる「内情」の分からなさ⁴をいい、外見のみでついにその「内情」は不明のままとなった「梨本の女」のエピソードと脈絡をつけるという展開となった。小説としての意匠が十分に加えられたものとして仕立て直されたのだとみたい。ともあれ、里見弴自身の新造語だという「一目惚」をそのタイトルとして改題、改稿したこの作は、インパクトのある秀作であり、実質的処女作の見事な復活であったのである。

「家出」（「白樺」、明43・7、のち「未明」と改題）は、その目次で（小説）とされるが、わずか四ページ分の短篇である。これも回覧雑誌「麦」発表のもの（「麦」第四号、明41・12）に修訂を加えたものだろう。

主人公「私」は父を亡くしている。前の晩、叔父や相良の爺に「恩知らずだ、犬だ、^{かどわか}誘惑者だ」などと罵詈雑言を浴びせられ、家を「出ます」と言ってしまったのである。小説の冒頭は、主人公がひどく興奮し寝入り、寒い冬の未明、お芳さんの声で目覚めたことを描いている。そして「これからの淋しい放浪の生活」を思ったりするのだが、茶の間にいるお芳さんが作ってくれた片栗を飲み、二人は手を取りあって泣き、別れの抱擁を交わし、「私」は「西京」（京都）の静かな街を停車場の方角に歩いて行くのだった。おそらく養家の娘さんのお芳さんと恋仲となり、養家の恩ある人たちと衝突を起し、いま家を出る主人公「私」の心情を中心に描いたものとして描くことができる。

この作については、志賀直哉に、「哀れな静かなシーンが未明といふ時間と共に一種のムードを作る。未明と云ふ時の感じを現はすのが目的なら或る程度まで成功して居るが、家出と云ふ事件を主に

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

した場合には、主人公の心理が少し緩慢だと思つた。もう少し鋭く皮肉になるか、女々しくなるか、どつちかになつて欲しかつた。」（『新作短篇小説批評』、「白樺」、明43・8）という評がある。私見では、この作は余りにコンパクトに纏められていて、前夜の養家の恩ある人々との葛藤やお芳さんなる恋人への思いがもう少し詳しく描かれてもよかったと思う。が、その簡潔さに一種の魅力もある。

「友達の見舞」（「白樺」、明43・9）は、その目次で（小説）とされた十三ページ分のものである。その梗概は以下のようなものである。

会社員の安部定吉の家は今戸の川沿いにある。洪水に見舞われ、階下は床から五六寸の所まで浸水した。安部は、恋女房の若い細君と下女の三人で暮らしていたが、会社の方は面白くないことがあって、半月程前から欠勤していた。二年足らずの家長経験で、今回の洪水が大事件である。薄気味悪いのは、寝静まった夜の対岸の物音であった。警鐘、子泣き、犬や牛の叫び、工兵隊の掛け声、太鼓、土手に働く人たちの声などである。その日の昼近い頃に、細君の姉に当たるお清さんが見舞いに来た。ついで五軒町の下駄屋の西内の主人が来た。会社の同僚も四五人見えた。向う隣家の沢の家は平屋で、家族たちを本郷の親戚の方へやり、主人一人が残っていた。沢の主人は安部に奥様方はもう立ち退いた方がよろしかろうと言ってくれたが、安部はなかなか決断がつかない。「家長などゝ云ふ面倒な責任が放擲りたくなつた。学生の背が恋しかつた。」としている。やがて、子供時分からの友達である大津がやって来た。大津は今日で三日続けて出水を見て歩いているという。号外があって、「三百人から死んだつて云ふぜ」と言い、それを出して見せた。そのうち夜食となり、対岸の景色を眺めていた大津は、おもむろに女の方は今のうち神田の方へと行った。安部の主人はそれに不同意はないが、自分一人の留守番は本意ではなく、大津が泊ってくれると言ったので決断できた。細君、お清さん、下女のお鶴は仕度をし、それを見送る安部の主人も従え、大津が先に立って道案内をした。お清さんは、一人留守番役となった臆病な西内さんがきっと一人で震えているよ、と言った。

のちに里見淳は、この作について、「もし権現堂の堤がきれば下町一円水びたしになる、と誠にやかに噂された明治四十年八月の豪雨を、大川端の住居で喰らつた若夫婦を訪れての見聞をそのまゝの写生文に過ぎないのだが、文壇的に微力だつたほとゝぎす派のそれには似ず、全盛を誇る自然派への追従が明かだ。」（『里見淳全集 第一巻』の「あとがき」より、筑摩書房、昭52・10）と回想している。なるほど明治四十年の八月二十四日は、「関東を中心に大暴風雨。死者四五九人。」（『日録20世紀1907』、講談社、平10・11・24）とされているが、淳が弱冠二十歳の折の実体験とはとても考えられないのである。実際のことは志賀直哉の日記を参照すれば明らかとなる。志賀日記の明治四十三年八月九日の項に、まずは「此日から出水の話あり、夕方帰宅。」とあり、翌八月十日の項に、「山内に水を見に行かぬかといふ、と相手が欲しい所だつたといふ、スツカリ仕度をして、出かける、……千束町で大分出てゐた……大鳥様の方へ行く、水がカナリひどい。」とあって、八月十二日の項では、「林の所へよつて見る、それからの所は山内の後で書いた、「友達の見舞」（出水）に近し。兎も角一泊した。」とあるではないか。淳のこの作における「大津」はやはり志賀がモデルであり、「安部」は志賀の中等科時代のクラスメート林三郎がモデルだということも判明するのである。また現に、明治四十三年の八月八日は、「東海・関東・東北地方に豪雨、関東一帯泥沼化。」、「長雨に続く記録的な集

中豪雨で、河川氾濫・土砂災害が続出。死者・行方不明者1357人、家屋全壊2765戸、流失3832戸に達した。」(『日録20世紀1910』, 講談社, 平10・12・15)という大災害だったのである。これでのちの弾の回想がいかにも信用のならないものかが証明された。

この作自体の出来栄をいえば、その描写は外側から客観的にしようとしていて落ち着きがあり、割りにいいものだった。また、家長として頼りない所のある安部よりもその友人大津の頼もしさが強調された感があり、それが志賀の一面だと知ると、むしろ志賀の勇姿が印象に残った。

「二月——四月」(『白樺』, 明44・1)は、その目次で(小説)とされる十一ページ分のものである。三つの小見出しが付けられて構成されているが、その内容を見ていこう。

最初の「白痴児」は、「二月末」のことで、妊娠したらしい「女」から至急面談したい旨の葉書を貰った「男」が、私生児とか墮胎薬などといった断片的な考えを浮かべ、やけ酒を飲み、女郎屋に入って帰る際に、勘ちゃんという白痴児を見たことを語っている。勘ちゃんとは「かう云う街の女」が産んだ「父の知れない白痴児」である。なぜ誰か殺してしまわないのかと思ったりするが、一方でどうかして「女」に吞ませる薬を手に入れなければならないという考えが頭を擡げていたのだった。次の「箱」は、「三月の初旬」のことで、「男」が風呂敷にくるんだ白木の小箱を持って「女」の家を出るところから始まる。「女」は流産したと言った。夕暮れの街に四五人の男の児が遊んでいたが、その群れに紛れ込んで先夜の白痴児が待ち伏せをしているような心持に囚われた。それから「実体らしい四十前後の車夫」を特に選び俵に乗り、「先祖代々之墓」とある墓石の前に立った。先祖に対して面目ないとかの心持は起こらなかった。車夫に手伝わせて箱を墓標の右側に埋めた。車夫に「何です、今のは」と尋ねられ、「猫だ」とごまかしたのだった。最後の「日なた」は、タイトルから見て四月初旬の季節と推測されるが、「男」が「女」を見舞いに朝からその家に行った折のことが書かれている。「女」には「平静な色」があった。鴨居にはかなり以前に「女」にやった或る独逸の画家の描いた「若き母」という三色版が金縁の額に入ってかかっていた。「女」は「もうよしましうね」と言った。

この作について、本多秋五は「現在これを独立の作品とみた場合、後続作品の照り返して読まれるにすぎないと思う。」(『明治文学全集76初期白樺派文学集』(筑摩書房, 昭48・12)の「解題」より)と手厳しい評をしているが、私にはもっと高く評価できるものがあると思えた。それは、無駄のない三段構成の展開のうちに、情婦を持った「男」の遊びの果てに訪れる不安や恐怖がリアルに描かれ、一方でその情婦の「女」がついに母になれることなく「男」との別れを口にする経緯がさりげなく伝わるように描かれているのがよいと思うからである。むしろ「男」と「女」として固有名を与えなかったのもよい。自暴自棄になっているらしい「男」の内心の苦しみ、やはり哀しい存在でしかない「女」のあり様が読み手に伝わり、何も里見弾の自伝的事項を知らずとも、十分単独の作(むしろフィクション)として読むに耐える佳品となっているのである。

「河岸のかへり」(『白樺』, 明44・5)は、その目次で(小説)とされるわずか五ページ分のものである。その簡潔な内容をさらに簡潔に纏めれば次のようになる。

須田町の交番の前に人立ちがしていた。魚金の平公が前で、後ろは若大将、河岸の帰りで仕入れの

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

車を引いて駈けて来た。平公はもう六十を越した老人だ。買出し役が辛くなっていたが、強がっていた。歩調を緩めてくれない若大将に話を差し向けるが、若大将は「さうさネ」「さうかネ」と言うだけで話に乗って来ない。平公は、主家の三人兄弟のうち、幼い頃から若大将が一番の鼻真だった。二十一になる真面目一方の今の若大将にも感心していた。お茶の水の女学校の前まで登って来た時は、平公は苦しくてたまらなかった。次から次へと同業者らの話題を持ち出した。「生得の話好き」の平公はたて続けに喋り、どんどん油が乗って来る。魚金は昔は小さな店だったが、今では大店になっていた。それを平公は誇らしげに喋り続けたのだった。我慢しきれず若大将は大胆に駈け出した。平公は梶棒を持ち直し、「光沢のいゝ禿頭」をやけに振りながら、腰をまげてひょこひょここと走った。

魚河岸への買出しの帰りの一齣を描いたものだが、その短い展開のなかに、平公の人柄、若大将の人柄がよく出されている。平公が魚金に勤め始めたのは四十五歳を越えてからの勘定になるが、その若い頃はいろいろ遊んだという感じだ。が、そういう妻子もなく孤独な平公は、魚金の人によくしてもらい、今も現役で勤めている。その体力の衰えを「生得の話好き」でカバーし、気力を奮い立たせているのである。若大将は無口で真面目な人だ。この人あって今日の魚金の隆盛があるのだと感じさせる。庶民の姿を生き生きと描き出した好短篇である。

この作について後年の弴は、「たしかこれも「麦」に出した習作だと思ふ。あまり自信もなく第二巻第五号の「白樺」に載せたところ、思ひがけなく泉鏡花の目に止まり、絶賛された時の、涙ぐむほどの嬉しさ、有難さは忘れられないし、また大いに勇気づけられもした。」(『里見弴全集 第一巻』の「あとがき」より、筑摩書房、昭52・10)と述懐している。残念ながら泉鏡花のその評を調査できていないが、傾倒する先輩作家に褒められ、若い弴が自信を得たことは想像に難くない。

なお、ややのちの弴は、この「白樺」初出作にかなりの修訂を加えて同じ題名で「中外新論」(大7・7)に発表している。大きな変更点は、「白樺」初出誌で「尤も平公が魚金に雇はれたのは、若大将の六つの年だった。」というのを、「そのくせ平公は、まだ若大将が生れないさきから、魚金の釜の飯を食つてゐた。」としていることである。また、若大将は「木ツ子の常坊」とされた。これらから、魚金に長く奉公して来た老齢の平公の仕事に対する心意気、鼻真にしてきた「木ツ子」の若大将があって今の魚金の隆盛があるという平公の一種の誇りなどがより鮮明となったのである。

七

「入間川」(『朱楽』明44・10)は、のちの弴の回想では、「つきあひ始めて間のない北原白秋から、彼の個人的な雑誌「朱楽」の表紙画と、次いで原稿も頼まれて書いたもの。「白樺」同人中でよその雑誌に寄稿したのは、これが最初。」「意識して、島崎藤村の欧文脈的な、いやにもつて廻つた筆法を真似た」もの(『里見弴全集 第一巻』の「あとがき」より、筑摩書房、昭52・10)とされている。私には、この作(『里見弴全集 第一巻』所収のものをテキストとする)から独特のユーモアが感じられ、なかなかの秀作だと思われた。以下はその概略である。

ふとしたことから「女」と気まずくなっていた「私」は、このままその「女」を路傍の人としたく

ない思いから、一度ゆっくり「そと」（傍点は作者）で会って話してみたいという手紙を書いた。「女」は遊女とみられるが、返事があって、承諾を得た。その日は「菊日和」の素晴らしい天気となった。どこへ行くとも決めていなかったのも、「女」のいう入間川に行くことにする。長くなりそうな道中の途中で、「女」に入間川へ行ってどうするのかと尋ねると、「女」は「お呪^{まじなひ}」か何かで病気をなおす人がいるので、宿痾から自由になろうと思ってのことだと言った。昼食もとらず、国分寺で汽車の発車を待っていると、「桐佐」で女中をしていた人とばったり会ったりした。「私」は「女」に「話さうと思つて来たこと」があるが、何か億劫になっていて切り出せない。入間川の停車場で降りて、馬車で笹井という所まで行った。目的の家はすぐ分かった。かなり待たされ、やがてその「女主人」に祈祷をしてもらい、「女」は「然しちきに癒りますよ」と言われた。そこはあまり雰囲気の良い所ではなかった。帰途、「女」は最初からあんなものが利こうとは思っていないとくさした。「私」はわざと「どうだい、今日は面白かつたかネ」と尋ねてみると、「女」は「ずるぶん入間川だつたことネ」と眉を顰めて答えた。「私」は思わずふき出してしまう。それから「女」は入間川を形容詞にして今日の出来事を振り返った。実にしっくりと来た。国分寺の停車場前の掛茶屋で二人は餅菓子や卵を食べて食い、互いの顔を眺めて思わずふき出してしまった。汽車のなかで「女」は、何のお話と改めて聞いて来たが、「私」は、一日辛苦を共にした「女」に「お話も何も、もう別にありやしないやネ」と言ったのだった。

この作の「女」のモデルは、吉原角海老楼の君代（本名森田みき）に相違ない。遊女との関係は小説では多くいわば「うち」でのことしか書かれないう傾向にあるが、これは「そと」でのことで題材が新鮮だった。しかもこの「女」のキャラクターが面白い。おそらくこの作は事実に立脚する度合いが強かったと思うが、あるいは出発前の「私」が新聞を買って九星占いを見たり、観音堂でお御籤を引くのは、のちの展開を考慮しての虚構だったかもしれない。ともあれ、高く評価したい。

「易い追離」（「白樺」，明45・1）は、その日次で（小説）とされる二十二ページ分のものである。

主人公秋山正三郎の夢から始まる。彼は家出をしていて、流浪の末、かつて彼の家の書生だった金兵衛（大阪の材木屋）の所に転げ込んでいたが、熱病のため、今死んでいこうとしている、という夢である。目を覚まし、なぜこんな夢を見たろうかと考える。一ト月ほど前に家出を企てたことがあったのを思い出した。夜おそく帰った彼は、父の部屋に呼ばれて小言を言われた。学校を怠けてくだらないものを書いている心得違い、不検束な生活、しまいには父の立志談、馬琴が引き合いに出る文学論にまで及び、二時間ほどになったという。が、正三郎は、父に向かって口答えをしたことはない。家出する自分の姿を思うだけである。ともかく「病氣」（性病か）をなおしてからだと思うのだった。そして以下は「正三郎の手記」となり、或る年の十二月十四日に始まり二十五日まで記載される。いやな夢、家出への思い、家出実行の想像などである。そして二十六日の夜おそく家に帰って来ると、この十日ほど彼を haunt していた家出願望という「悪鬼」が易々と「追離」されていたのだ。

小説としてあるのだから随所に潤色や虚構も張り巡らされているのだろうが、私には作中の父の存在が印象深かった。おそらく現実の母もこのような父に逆らえず、ひたすら「家出」を想像するしかなかったのだろう。志賀直哉と同じような家のなかでの苦悩を抱えていたのを確認できる。作品の出

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

来栄えは、全体的に冗漫な感じがあり、短篇小説としてのメリハリに欠けるように思えた。

「腹いたみ」(「白樺」, 明45・4) は、その目次で(小説)とされる二十三ページ分のものである。

江戸時代、寛文十二年が小説の現在時となっている。若い修業中の画家助之進は、去年の五月、遊里に初めて足を踏み入れ、四つ年上の若松という花魁を識った。一年余りを経過した今、別れの時がやって来ていた。その愁嘆場がしばし描かれる。若松は、深みに入るのを恐れ、助之進の修業道のために愛を捨てるのだという。が、別れの直後の助之進は清い尊いものを感じていた。その頃より腹いたみを起こすが、友の三之丞にその日の出来事を話し、夜明け近くには腹いたみも落ち着いた。翌日、三之丞はおせっかいにも昨夜遅く若松に考え直してほしいと言いに行ったら、若松はその後半病人状態で、ぜひまた会ってくれるように言ってくれと頼んだという。助之進は白けてしまった。あの清い涙が汚されたと思った。もうあの「清い尊い感情」は還って来なかった。そしてまた腹が痛み出した。最後は、「若い英一蝶に、或る時こんなことがあつたやうな気がする。」と締めくくっている。

里見淳のいわば歴史物であり、異色作に思える。が、なるほど英一蝶(1652~1724)の「二十一歳」は寛文十二年に当たる。これはあり得た話だと感じさせる。むろん、淳にも遊里での体験があり、それが形を変えてこのような作を執筆させたのだとも想像できる。遊里での遊びでは、志賀も淳も、自身が墮落することを一番恐れていた。そういう淳の思いの反映をこの作に窺うことも可能だろう。

「立腹」(「白樺」, 大元・11) は、その目次で(小説)とされる二十ページ分のものである。その内容を纏めるのに少々苦勞したが、以下のようなものである。

それは、ひと夏を或る海岸の避暑地で過ごした早乙女、宮川、郷の間に起こった喧嘩(口論)の話が中心となっている。ある日突然そこに早乙女を訪ねて彼の情婦(「沢田氏」)がやって来たが、彼女が帰ってから、早乙女が郷、ついで宮川に対して立腹したというのである。それを作中の「私」が宮川と早乙女の二つの角度から語るという趣向を取って展開する。喧嘩の発端は、情婦が帰ったあと、郷が「金」の問題でその関係が続いているのではないかと早乙女に思い切った評をしたことにある。それを早乙女は、情婦が「金」のために関係が続いているとせず、自分が払った「金」の代価としてその女を弄んでいるというふうに解した。つまりその自尊心が傷つけられ、立腹したというのである。続いて宮川が、「こいつア皮肉だつたナ」と「いかにも上から見下ろした態度」(宮川側からすれば調停の意を込めた)で言ったことに、悪意を感じ、立腹したのだという。その後の早乙女は、腕力ではかなわない宮川にわざと自家を空けねばならぬような終列車に乗せ、復讐もしたらしい。郷とは口論の際に用いた「切り込む」という言葉がひょんな事から出て仲直りが出来たという。が、早乙女の話の聞きながらの「私」は、半年ばかり前の或る夜、早乙女が自分はどうも「感情の力が弱い」(例えば自家の書生がひとの手紙を開封して見ても寛大でいられるという)と言ったことを思い返していて、早乙女のこの立腹の話に何となく「不純なもの」があるような気がしたのであった。

以上のような内容だが、結局のところ、この作は、その作中でも語られる「自分を観る」ことの難しさ、ひいては創作の難しさを一篇のテーマにしているように思えた。早乙女の立腹の話は、彼の性格(憎む感情が実生活上に形を取って来ない)からして精確ではない感じを聞き手の「私」に残した

のである。作の出来栄としては、全体的にその描法（早乙女や宮川への焦点化が弱く「私」が表面に出すぎている）に問題があるように思え、高い評価は与えられない。

「手紙」（「白樺」，大元・12）は、四十一ページ分にもなる（小説）となっている。が、これは多少の虚構や潤色はあるにせよ、稔の自伝的作品の嚆矢である（本多秋五は「これは作者が自分の生活と深いかわりのある作品を見せた最初のもの」（『明治文学全集76初期白樺派文学集』の「解題」より、筑摩書房，昭48・12）としている）ので、そのつもりで梗概を綴っていきたい。

主人公の昌造（稔）は、今、札幌の学校で教鞭を執っている長兄（武郎）を訪れようという両親の付き添いでこの地札幌に来ていた。それは七月中旬過ぎの季節であった。宿屋の座敷の机には、東京を出る前に「毎日規則正しく書き続けて来た自叙伝の原稿」があったが、なかなか進まず、二十五歳の彼は「厄年」ということを気にかけていた。近接過去が回想され、二月頃企てた「家出」が出来なかったこと、五年越しの「第一の女」（のちの「君と私と」で判明する）と別れたこと、「第二の女」（角海老楼の君代）とは別れようとしたが別れられなかったことなどが語られている（以上「一」）。彼は札幌に着いてから、もうすでに遊里に遊んでいた。「第二の女」のことを思い出して手紙を書く。その中に「兄キの所では私たちの着いた日の朝赤ちやんが産れて」（武郎の次男敏行は明治45年7月17日に生まれている）ゴタゴタしていて、両親とともに旅館にいるが、一日一回は兄貴の所に行くので、手紙はやはりそちらに送ってくれということ、一人の友達もなく勉強も出来ないで「兄キの所の二つになる男の子」（長男行光、のちの森雅之）と遊んでいることなどを書いたのだった（以上「二」）。彼は「第二の女」とのことを色々回想する。「暴君のやうな焰の悪戯がこの里をト舐めにした時」（吉原大火は明治44年4月9日）、彼は、逃げるのを手伝ってやったのである。文学書も読ませ教育しようとした。今、彼女はその母とともに府下に居住している。こうしてズルズルベッタリになった。が、一方に仕事がある。それは「人類にとつて意義のあるやうなものでなければならない。」としている。ともかく、「仕事を常に愛人の第一位に置かねばならぬ。」と思っているのだった（以上「三」）。その翌日、昌造は両親のあとに従い、長兄（哲雄）の家に出かけた。自分宛の三通の手紙を見出した。まず、「Hと云ふ友達」のものを開き、この友の人柄のよさを思う。次に、「Kと云ふ友達」（園池公致、これは本多秋五の説）のものを読む。Kに起さっている女性問題が書かれていた（以上「四」）。そして最後に「女の手紙」をひろげた。そこには「陛下の号外」（天皇崩御は7月30日）で「こんな田舎まで」大騒ぎのこと、「両国の川開二十日も、急の御遠慮にて商人は大変な損害」ということ、「今日の寒暖計九十七度五分。」（摂氏に換算すると約36℃）ということなど、東京の様子が書かれていた。兄哲雄の誘いで、総領息子の清一（これは虚構だろう）も連れ皆で中島の遊園地に行くことになった。彼には兄に話したいことがあった。両親に「信用の厚い兄」の口から持ち出してほしいことが二つあった。一つは、籍だけあって出席しない学校と縁を切りたいこと、もう一つは父母の家から離れて住みたいという望みである。「昨今の死んだやうな空虚な生活」の打破。が、いよいよ切り出そうとした時、並んで歩く哲雄が、「これが札幌の遊郭だ。どうもこんな町の中央^{まん}に在るんだから困る。この頃頻りに移転説は出て居るんだがネ」と言った。彼が二三日前に行った所である。で、さすがに「ヒヤリ」として、話も言いそびれてしまったのだった（以上「五」）。その

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

夕方、昌造は、兄の書斎の机を借りて、Kの手紙に返事を書いた。そして風呂に入ろうとする時、このところの手紙で自分のものが「一番厭味」で「あてぎ」の多いのが不愉快だと考え急に心が暗くなったのだった（以上「六」）。

この作からは、まずは第一に、弴が自伝的長篇に取り掛かり仕事への意欲を旺盛にしていることが窺える。「今まで極く親しい友達にも見せないとした自分や、それを取り廻く陰の絆を悉く明みにサラケ出して、過去の放埒な生活から蟬脱しやうと云ふ覚悟」で、幼年時代からの「長い自叙伝」にかかり、「二百頁」あたりまで来たという。しかもその「自分」には、「寸分の偽を許さぬ」「これまで誰も手をつけたことのなかつた所まで行かう」という野心があった。が、諸々の点でかなり裏切られていると感じられ、進捗しなくなったというのである。これを事実とすれば、自伝的長篇の試みは志賀直哉のそれ（いわゆる「時任謙作」の着手は大正元年十一月）より早かったということになるのだ。

次に、この作では「第二の女」のことがその手紙のやりとりでも中心を成していることに気づく。翻ってこれまでに見てきた「入間川」は当然として、「腹いたみ」や「立腹」（早乙女の情婦「沢田氏」）にもこの女性との関係の反映が改めて感じられるのだ。

さらに、この作から弴の家出願望が根強いものとして感じられる。その萌芽がいつ頃からかは特定できないが、翻って先に見た「家出」、「易い追儺」はやはり書かれるべきものだったと得心が行く。

八

「君と私と」（「白樺」、大2・4、5、6、7）は、初期里見弴文学での最重要作である。この作で独立した一篇の論文を書きたいほどである。が、ここではそのためのいわば覚え書きとして纏めておきたい。まず、これは自伝的作品なのでその梗概を綴ることは極めて大事であり、それから始めたい。

第一回目（大2・4、「前篇」の一部として四十四ページ分ある）の冒頭から、「君」（作中では「坂本」、モデルはむろん志賀）を知るようになった「私」（作中では「加島」、弴）の記憶が順次書かれている。そもそも「君」は自家の「俊之助兄」（作中では「赤松」、壬生馬）の友達である。「私」が十一二の夏、「君」は鎌倉の別荘に「俊之助兄」を訪ねて来た。泳ぎでの飛び込みは「君」が一番上手で、「私」はすっかり感心してしまった。おそらく「私」の十四の夏、「俊之助兄」に連れられ上総の鹿野山に四十日ほど暮らしたことがあった。「君」は「岩村先生」（岩本禎）と一緒にやって来たが、その折、六里の山道を歩かされたのは遺恨となっている。同級の「小川」（児島喜久雄）と相談して、五六人の友達と絢友会というものを作ったのは、「君」や「俊之助兄」などの睦友会を真似てのことだった。やがて二つの会は野球の試合をするほどに近寄っていた。秋（明治37年）、妙義の方へ兄や「君」たちに連れられて行った。兄は「この地方に隠れた詩人」（島崎藤村）を訪ねようとし一人別れた。次の年（明治38年）の正月、「私」は「君」の家に呼ばれ、コレクションの錦絵を見せてもらった。やがて「俊之助兄」が洋行することになった。「私」はこの兄を「一番たよりにして居た」ので、別れることはつらかった。五月十三日、兄の船は棧橋から離れて行った。「私」は涙を流し、「君」も泣いていたと思う。「君」は兄の愛人「さよ君」（関安子）の後事を兄から頼まれていたのだった。そ

の後の「私」は、芝居を見たり小説（とりわけ鏡花や紅葉）ばかり読み、「君」との交渉も多くなった。「君」が大学に移った年の夏（明治39年）、「君」たちと塩原から日光の方へ旅行した。「君」に噂を聞いていた「東久世君」（武者小路実篤）とも会った。その翌年（明治40年）の四月、「長兄」（武郎）が洋行から帰って来た。「君」たちは西洋の話を聞こうと自家に集まって来た。「君」は小説を書き始めた。未定稿が多かったが、筋を話すのが上手だった。やがて「私」も小説を書き始め、「君」から丁寧な評をしてもらったりした。「君」に起こっていた「ラブ、アフエア」（明治40年の夏）は、「三四年後」まで「私」に話そうとはしなかった。「私」は「君」に聞いてもらいたい「苦しい秘密」をこの秋から持っていた。それは自家の女中頭「いち」との愛を伴わない肉交関係だった。春（明治41年）、「君」と「小林君」（木下利玄）と三人で上方旅行をした。この旅以来、「君」と「私」の間は目に見えて近づいて来た。その「子供扱ひ」も殆ど消えてしまった。「いち」との関係を「君」に話そうとして「君」を訪れたことがあったが、「東久世君」が来て「私」の告白を妨げた。鎌倉の別荘で、同級の「小川」と「北小路」（正親町實慶）に告白したが、「マスロワ」が「四十女」だなどとは言えなかった。

第二回目（大2・5、「前篇の続き」として（終り）までの四十六ページ分）は、「君」たちの回覧雑誌「望野」に刺激を受け、「私」と「北小路」とで回覧雑誌「麦」を始めることにし、仲間にも知らせ、スタートさせたこと（明治41年10月）から書いている。「私」は「伊吾」という匿名を用いたりした。「私」の書いたものは「君」たちから「器用だ」という評を受け、「君」からは小器用である（これは慰みにすることの意）ならよほど用心すべきだという評を受けていた。そこで「麦」の一号には翻訳を載せた。これは「望野」同人の方にも回っていたが、「私」はいつも一番「君」の評を気にしていた。細かな技巧に興味を持っている点などで、「君」と「私」はよほど似通った傾向を持っていたからとしている。追憶小説の方は誰からも好評を受けた。「望野」四人と「麦」四人は近寄ったが、とりわけ「君」と「私」は親しくなるようになった。が、「君」が「東久世君」「小林君」「北小路君」（正親町公和）などと「同じ水平」で「私」を見たのは折々「私」を苦しめたとしている。翌年（明治42年）に入ってから「麦」の活動の回想が続く。ある時、「君」は巴里にいる「俊之助兄」の巴里ジャンヌとの「ラブ、アフエア」を「私」に告げた。その年の秋、文科（大学）に進んだが、次第に教室に出なくなった。「麦」は二十四号で最後とし、仲間は四方に離れて行った。「私」が「いち」を相手にやけ酒をあおるような肉交を恣にしたのはこの時分だった。母とは交流が少なく、他人のように生きていた。「君」とはよく寄席に行き、落語の興味も「君」から譲られたのだった。その年の春ごろから二人の「ぶらぶら歩き」は始まっていたが、自家の方へ足を向けたくなく、夜の街を「流れて」歩いた。

第三回目（大2・6、「中篇」の一部として五十七ページ分）は、翌年（明治43年）の正月中旬、「君」が「私」の家を訪ねて来た折のことから始めている。「君」は、まだ「東久世君」にしか話していないとして、「……僕はネ、遊郭へなんぞ行くんだヨ」と話し出した。「君」は前年の九月に初めて吉原へ行った時のことから話した。それは「自分自身の意思」で思い立ったことという。「私」には「君」の遊郭行が「殆ど革命の軍に向ふ戦士のほどに勇ましく」思われた。懇意になった「お職」（角

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

海老楼の大巻、榊谷峯)の話もした。そして「君」は「サアこんどは伊吾の番だ」と言った。「私」は「いち」との関係をかっつて宮戸座で一緒になった「煙草屋の女」の方へ巧みに辻褄を合わせ移し変えて話した。翌晩は「君」に連れられて吉原を見物しただけだったが、その後間もなく、「私」は一人で「河岸通りの小さい^{うち}楼」に足を踏み込んだのだった。同じようなパターンで洲崎にも行くようになった。或る晩、「君」の部屋に同志が集まって雑誌刊行の相談をした。「望野」からは「東久世君」「北小路君」「小林君」「君」の四人、「麦」からは「大内」(園池)「小川」「田島」(田中雨村)「北小路の弟」「私」の五人、「桃園」から「澤君」(柳宗悦)「辻村」(郡虎彦)の二人、都合十一名でその雑誌名を「望野」を改めた「S——」に決めた。「君」の六畳の書斎は煙がこもり、やがて話は「七義」(一義の問題に遠い、つまり無意味な冗談のこと)に陥るようになった。が、ともあれ、「一ト塊り」で世の中へ出ていこうとしていた。二月に入って、足かけ六年ぶりで帰って来る「俊之助兄」の噂があちこちで出た。「私」は「君」と国府津まで出迎えることにした。兄は同郷の高官が乗った車室にいたが、そこを辞して出て来た。帰りの車中での話は「ちぎれちぎれ」であった。その翌々日の朝、「私」は「いち」から妊娠を知らされた。「私」は自分の「^{ヴァニティ}虚栄」以外のことは考えず、「君」にも「煙草屋の女主人」に起こったこととして辻褄を合わせながら話した。が、子供は「死んで墮りて居た」という。「小さな^{ヴァニティ}虚栄」だけは助かった。「小川」の友達の紹介で或る美術商の家へ印象派の画家の絵を見せてもらいに行ったことがあった。モネエ、ルノアル、ピサロ、ギヨマン、ドゥガアなどである。自家では「私」が学生の身で「S——」に関わるのを早すぎるとして好まなかった。「私」も作品から事実を探られるのを恐れて匿名を用いることにした。いい加減な名をこしらえた。北海道からは「哲雄兄」(武郎)の原稿も届いていた。「さよ君」と「俊之助兄」のことは破約となった。「君」は「赤松はもうちつとかう云ふ問題に神経質であつてもいいナ」と言い、不愉快そうであった。が、「君」は「私」の家に来ても「兄の部屋にばかり居る」除け者のようにされている「私」は嫉妬した。とはいえ、「俊之助兄」が「私」のデカダン風の生活を「君」のせいにして、「君」と言い争うことがあったようだ。「いち」から実は流産ではなく墮胎であったと打ち明けられたのはこの時分である。「私」は墮胎の下手人だった。この話を「君」にした。「君」の日記に「伊吾と云ふ男は思つたより太い奴だ」とある。相変わらず二人でいろいろな所をぶらついた。この「粘着」は二人だけの間に限られていた。七月の初めから、「俊之助兄」と、それより少し遅れて帰朝した「林君」(南薫造)の滞欧中の作画を上野で展覧することになった。いろいろ忙しく立ち働いた。夏、一緒に初めて「君」の行っている吉原の「E——と云ふ^{うち}楼」(角海老楼)に上がった。「出水」があり、二人であちこちに出かけ、今戸の「榊君」(林三郎)を見舞ったこと(泊まった)もあった。「俊之助兄」の婚約が調った。「さよ君」の話が片付いてまだ幾月も経っていなかった。「君」は兄を「赤松はヒドク社交的になつたネ」と評した。遊びに伴う病気に対し、「君」は注意深くしていたが、まず「私」がやられ、一ト月ほど遅れて「君」がかかった。十一月の「S——」をある彫刻家(ロダン)の七十歳の誕生の記念号とすることにした。「君」は甲種合格で兵役に服することになっていた。「君」の入営は「私」にとって心細かった。市川まで見送った。が、間もなく、兵役免除の報のハガキを受け取った。「君」が帰って来ると、また始終一緒になった。

第四回目（大2・7、「中篇の続き」として（中篇未完）までの十五ページ分）は、「S——」の正月号に発表した作品（「二月——四月」）を「俊之助兄の妻君の母親」が読んでひどく感情を害し、「俊之助兄」から「私」の生活の不検束や頹廃を責められたことから書き出されている。ただ「私」は「君」の興味に支配されて出来ていると断じたような「兄の口吻」に腹を立ててしまった。しかし、「私」は沈黙かうんうんと答えるだけであった。前年の秋頃より「私」は時々一人で「E——楼」に出かけるようになっていて、「桂木と云ふ女」（君代）を「安住」にしていた。この女とのことがしばしば書かれる。「君」に誘われて「亜米利加の飛行家」（マース）の目黒競馬場での飛行を見に行ったこともあった（4月）。「君」はいつまでも不思議な興奮の状態にいた。その晩、「君」は「私」の作物を無遠慮に評し始めた。正宗白鳥のようになっていく、小白鳥ではダメと言った。また、生活が中途半端なんだよと言った。吉原の大火の翌日、二人は誘い合わせて見物に出かけた。「私」は大火の前晩から「E——楼」にいて最初から見ていたのだった。その日の混雑の中で、「君」はその一ヶ月ほど前に廓を出ていた「安住」（榊谷峯）に行き遇った。この時分には「君」と「私」とのぶらぶら歩きはまるで或る病気のようになって来ていた。「君」は自分のうちへ来て泊まれという。「私」は「イヤだ」と言った。その頃「私」はよくうちをあけて父に叱られていた。「胸苦しさ」があったが、だんだん「君」の家の方へ引っ張られて行った。それでも「君」の家に行ってしまうと、時には夜明けまで真面目な問題を話し合っていた。こうしていられない。「私」を催促するものが迫って来た。

五回目の原稿は印刷所の三秀社で紛失したため、上記のような「君と私と」（「白樺」掲載は合計百六十二ページ分になる）は未完に終る。その梗概から、「白樺」前史などのことも分かり貴重な資料となっているが、やはり里見弴と志賀直哉の関係が中心テーマになっていることは言を俟たない。では、そこにどのような研究上の課題があるのか。ここでは、以下の二点を挙げておきたい。

第一に、志賀直哉の大正元年九月二十一日の次のような日記記事に注目しなければならない。

午後伊吾来る、伊吾は「腐合ひと蟬脱」といふ小説の書きかけを持つて来た。突つ込むでゐないのに下品を恐れず何んでも書いてあるのが第一にイヤだった。道德との関係も突破つて上へ出て自由になるのでなく、逃げて呑気になるのだからイヤだった。

夕方四人で出る、蛇の市へ行く、酒も飲む、吉原に行く……（以下省略）……

ここでいう弴の「腐合ひと蟬脱」は「君と私と」の原型作の一部だったと考えられる。その内容は、志賀の「暗夜行路草稿」12および13などによると、志賀が遊里での遊びをし始めた頃からのもので、弴の墮胎した相手の女がそれまで志賀に話していた煙草屋の女ではなく弴の自家の女中頭であると告白して来たというものだった。志賀は弴に「二年八ヶ月間」だまされ続けてきたということになる。つまり友情の亀裂を感じたのだ。しかも、この日のことは、『暗夜行路』（「改造」、大10・1～昭12・4）の前篇第一の一と密接な関連を持っている。作中の「阪口」のモデルは果たして里見弴と見ていいのかなどの問題が存在する。ともあれ、志賀と里見の確執の問題は一筋縄ではいかない。弴ののちの作、「善心悪心」（「中央公論」、大5・7）や「或る年の初夏に」（「新小説」、大6・6）なども視野に入れて追究しなければならないだろう。

第二に、志賀が、「君と私と」の三回目が発表されたあと、「モデルの不服」（「白樺」、大2・7）を

初期「白樺」の有島生馬と里見弴

発表していることである。その冒頭部は、「君と私と」四月号の分は面白かった。五月号の分もまあ面白かった。六月号に来て僕は急にイヤな感じを受けた。あれに書かれた僕を僕自身として平気でゐるのは、お前は下らない奴だと云はれて平気でゐるのと同じやうな気がして来た。」というものである。「君と私と」の三回目に怒っているのである。先に見たように、弴は自家の女中頭との関係はその一回目、二回目ですでに公にしている。三回目の何が志賀に不服を覚えさせたのか。その一番の不服の箇所はおそらく、作中の「君」の遊郭行の告白部分、とりわけ「……君の姿は、殆ど革命の軍に向ふ戦士のほどに勇ましく思はれた。」（ここに志賀は傍点を付している）の所にあるだろう。これではその遊郭行は勇敢だが「金」で女を買う安っぽいものにしか見えない。志賀の遊郭行の動機（これ自体難しい問題だが私見では志賀のキリスト教離脱と深く関わる）を弴が正しく理解していないというのが不服だったのかもしれない。狭く「君と私と」に限定しての志賀に齎した諸問題説明も課題となる。

九

里見弴は、大正二年の十月、長年の念願であった「家出」が叶い、大阪に住まうようになる。ここではこれ以降「白樺」に発表された短篇三作を紹介、短評を施しておきたい。

「實川延童の死」（「白樺」、大2・12、のち「河豚」と改題）は、わずか九ページ分（目次ではなぜか（小説）と付されていない）の短篇にすぎない。その内容は以下のようなものである。

延童は、中村高麗之助の代役で博多まで下り、広島に立ち寄った折に頭痛を催した。大阪に戻って正月の十四日の晩は「伊豆徳」で「玉庄の河豚」を食したが、その翌日から体調はどんどん悪くなっていた。河豚にあたったのかもしれないと思うが、まさかの気があった。しかし夕方には、その体は自由にならず、口も利けず、床に移された。やがて見舞客やら手伝いで家はいっぱいになった。当時の名優海老十郎も見舞に来た。夜半、その体は縁先の土に埋められた。土の中で延童は九年前に火事で死んだ親仁のその時などを思い返していた。一時間ほどのち、延童の体はまた土から掘り出されて床の上にあった。「惜い人だつた」と海老十郎が言った。弟の小延童は堪えていた涙を流した。少なくともかつての情人も来ていた。翌日から玉庄は永く店を閉じた。明治十六年のことである。

河豚の毒でその体が漸次弱って行ってついには死んでいく延童の心理、感覚を巧みに描いている。とりわけその感覚描写が迫真性を持っている。おそらく作者は延童の内側に入り込んでいるのだろう。また、外側からの描写もうまく、二十九になる延童が、歌舞伎界でも有望視されていたこと、その女道楽のあり様なども分かるものとなっている。

後年の弴は、この作を、苦心の末の「手筈」を感じた仕事だったとしている（『里見弴全集 第一巻』の「あとがき」より、筑摩書房、昭52・10）。コンパクトに纏まった秀作である。

「少年の嘘」（「白樺」、大3・4）は、その目次でも（小説）とされる、十九ページ分のものである。この作は、本文に一行あきを四ヶ所設けた五段構成となっている。まずは、梗概を記しておこう。

昼休み中の学校のとある教室に高等一年の生徒一人と或る教師だけがいる。何か小さな昆虫（冬の

蠅か)の羽音や運動場で戯れ遊ぶ全校の生徒らの声や足音などが遠く聞こえるぐらいで、教室はしんと静まり返っていた。その日、級中で義雄一人が休暇中の日誌を書いて来なかった。義雄は、つい「うちに置き忘れて来た」(傍点は作者)と「嘘」をついた。教師にすぐ取ってらっしゃいと言われ、家に帰って大急ぎで間に合わせの日誌を書き、いま持参して来たのだった。半紙二枚きりのメモ書きのような日誌である。教師はそれを見て、やはり書いていなかったのだと思った。それから教師の説教が始まった。「嘘についてはイカンぜ」と言い、さらに「……一度でも嘘をついたが最後……」、少し間があり、「……もうさうなつたら人間もお仕舞だ。……」などと言った。上にも下にも評判のよいこの教師は、少年に自白を強いることはせず、「虚偽」は「^{あら}有ゆる悪徳の始り」などといった一般的な訓戒に止めた。間もなく、午後の始業の鈴が鳴り響いた。で、処分は「^{とめいさ}止置」となった(ここまで第一段)。次に、学校の成績も中どころでこれまで休暇中の日誌などにも積極的だった義雄の今回の件についての「^{エキスキウス}釈弁」の次第が語られる。この冬休み中は、奈良の叔父の家の事情で二人の従兄弟が大阪市の郊外にある義雄の家に泊まりに来ていた。三人はすぐ友達になっていろいろ遊び呆けた。とりわけ自分と同年齢になる兄の方の従兄弟に対しては「小供ながらに接待と云ふやうな礼儀の心持」が働いていた。奈良の二人の従兄弟が迎えに来たその父親に連れられて帰ったあと、義雄は明日に迫った日誌のことを思い、しおれ込んでしまった。やがて母親や女中頭に日誌のことが知られ、同情を受けたが、自分で自分に「同情」したということが「彼の^{エキスキウス}釈弁」を形成したのだった(ここまで第二段)。次は、義雄の「嘘」についての二つの感じが示される。一つは「嘘も方便」というような考え方である。家族や周囲の人たちへの観察などから、これは心底から悪かったとは思えず、後悔の念も起こらなかったという種類のものである。もう一つの「嘘」は心底から悪かったと思うそれである。義雄が七つの時、茶筆筒の引き出しから験温器を見つけ、壊してしまったことがあった。白状するその勇氣は出て来なかった。二十日はどして発覚し、義雄に嫌疑がかかったが、剛情に否定した。今に至るまでのこの秘密に「嘘」の恐ろしさを思った。しかし彼にとっての「嘘」は常に「自らを護るため」のものだった(ここまで第三段)。「止置」をされている義雄を喜んでいるような友達もいた。やがて義雄は「止置」の処置を不当だと考え始めた。「凌辱の念」も激しく働き、教師こそ彼を「嘘つきの罪」に陥れたのだとして憎むようになる。「復讐の念」さえ教師の上に置いた。そしてそこから立ち去った。十五分ほど後、教師が誰もいない教室に入って来た。逃げたなと思ったが、腹も立たなかった(ここまで第四段)。同じ日の夕方、野井戸の側に死を覚悟した少年が「ボツネンと」立っていた。帰途の義雄の考えは変化していたが、教師への恨みだけは変わらなかった。何かの形で「思ひ知らせて」やることが出来ると思った。するとすぐ「自殺と云ふ考へ」が浮かんで来た。彼の短い生涯を暗いものにして思い浮かべさせた。気づくと家の近くまで来ていたが、じき家の台所の灯を見ると、野井戸のある方角へ真直ぐに歩いて行った。長男なので、財産を弟にやってくれとする簡単な遺書も書いた。寒い、制服もシャツも脱ぎ、それらをきちんとたたんだ。それから井戸に入った(以上、第五段)。

この川村義雄という少年は自尊心がすこぶる強い。その「嘘」は「自らを護るため」のものだった。また典型的な内向型の性格である。そういう少年が生まれて初めての「処罰」を受けた。そしてそれ

初期「白樺」の有島生馬と里見淳

を与えた教師への憎悪を次第に増幅させて行った。が、この教師に非があるとは思えない。ごくありふれた指導だったと思える。こんなことを考えていたら、この作は現代性のあるテーマを持っているように思えてきた。このような事件が今の教育現場で起きても何ら不思議ではないのである。なんか、恐ろしいものが読後感として残った。

この作のテーマは、やはり「嘘」にあるだろう。「嘘」といえば、先に「君と私と」を見て来たことからしても里見淳自身の影がとつぷりと下りているとせねばならないだろう。義雄少年はどんどんといわば蟻地獄のなかにはまって行った観がある。が、このような少年の心理描写は里見淳でないと書けないだろうと思わせる。異色の作だが、現代に通じるものが感じられたので佳品と評価したい。

「勝負」（「白樺」，大3・8）は、その目次で（小説）とさせていないが、巻頭に置かれた十ページ分の創作短篇である。これ以降、淳の「白樺」誌上への発表はなくなってしまう。そういう点でも、この作で里見淳の初期が終わると見ていいかもしれない。では、その梗概を見てみよう。

ご維新前の江戸時代、遊里への侍衆の公然宿と茶屋の間に立つ案内人といった妙な職業があった。稲葉銀十郎は東本願寺の家中でそういう案内人の一人であった。二十八九の、体格も気性もよい男である。大晦日の夕方、銀十郎は苦しそうに歩き、腹を切らねばならぬと思っていた。預かっていた三千両近い金子を賭博で使い果たしてしまったのだ。が、彼は武家生れではなかった。数刻のうちに、その失った金子を「再び同じ冒険」で取り戻すしかないと思いつく。春着を金に替えて七十両を懐にし、賭博場に入る。長か半か。が、彼は「身うちに続いて居る闘」に集注することが第一と思っている。勝っても彼は頬の肉一つ動かさなかった。どんどん倍額になって戻って来た。長か半か。殺気立つ賭博場。しかし銀十郎には周りのざわつきは耳日に入らず、もう一心不乱だった。夜の引き明け前に、稲葉を腕力でその住居まで送り届けたのは、かつて彼に深い恩義を受けた博奕打ちであった。諸方の払いも済み、春着も受け出された。命の助かったのは、「あの若い博奕うち」のおかげだとして、その夜取った金子の余った分（それもかなりの額）を悉くその男にやってしまった。

これは、痛快な話であり、奇蹟的な話でもある。元手七十両で、倍から倍に勝ち続けると、六回の勝負をして、四千四百八十両が手元に残った計算になる。ところで、銀十郎の「身うちに続いて居る闘」とは何か。それは、一回の負けも許されない瀬戸際の勝負勘に集注する意力、気力のことなのだろう。あるいは賭博の勝ち負けを超越した何かであったか。だから、その大勝利のあとはもう動けなくなっていたのである。この作は、小説の面白さを堪能できる秀作であるとしたい。

参考文献

- 瀬沼茂樹『日本文壇史19白樺派の若人たち』（新装版）、講談社、昭54（1979）・3。
 河島英昭『ローマ散策』、岩波書店（岩波新書）、2000・11。
 竹山博英『ローマの泉の物語』、集英社（集英社新書）、2004・8。
 本多秋五「解題」（『明治文学全集76初期白樺派文学集』、筑摩書房、昭48（1973）・12）。
 紅野敏郎「有島生馬論—その初期の検討—」（早稲田大学「学術研究」第十五号、昭41（1966）・12）。
 紅野敏郎「解説 有島生馬—その文業の特質—」（『有島生馬全集 第3巻』（復刻版）、日本図書センター、1997・3）。

大西 貢「志賀直哉と里見淳との間」(「愛媛大学法文学部論集 人文学科編」第一号, 平8(1996)・7)。

大西 貢「志賀直哉と里見淳との確執——『暗夜行路』草稿における里見淳の役割——」(「愛媛大学法文学部論集 人文学科編」第二号, 平9(1997)・2)。

近藤富枝『今は文 吉原のものがたり』, 講談社(講談社文庫), 昭61(1986)・9。

(みやこし・つとむ 文学部教授)